

『訳解笑林広記』全注釈(十)

川上 陽介(工学部教養教育センター)

序

本稿は、『訳解笑林広記』全注釈(一)～『富山県立大学紀要』第二六卷、二〇一六年三月)、『同(二)』(『富山県立大学紀要』第二七卷、二〇一七年三月)、『同(三)』(『東アジアの古典文学における笑話』、新葉館出版、二〇一七年一〇月)、『同(四)』(『富山県立大学紀要』第二八卷、二〇一八年三月)、『同(五)』(『富山県立大学紀要』第三〇卷、二〇二〇年三月)、『同(七)』(『富山県立大学紀要』第三二卷、二〇二二年三月)、『同(八)』(『富山県立大学紀要』第三三卷、二〇二二年三月)、『同(九)』(『東アジアにおける笑話』、文学通信、二〇二三年四月(予定))の続稿である。前稿に引き続き、遠山荷塘施訓『訳解笑林広記』(文政十二年(一八二九)刊、半紙本二卷二冊、全三〇五話)第二二話から第一三話までの原文・書き下し文・日本語訳・注釈を掲載する。

和刻本『訳解笑林広記』及び中国笑話関連資料の諸本、底本、凡例等については、第一稿を御参照頂きたい。『富山県立大学紀要』所収の論稿は、すべて富山県立大学附属図書館ホームページから閲覧及びダウンロードが可能である。

121 争坐(座席を争う)

原文

争坐

眼与眉毛曰。我有許多用處。你一無所不能。反坐在我的上位。眉曰。我原没用。只是没我在上。看你還像個人哩。

書き下し文

坐を争ふ
眼^め眉毛^{まゆげ}と曰^{いは}く。我^{われ}許多^{あまた}の用處^{ようじょ}有^あり。你^{なんぢ}一^{いつ}も能^{よく}する所^{ところ}無^なし。反^{かへつ}て我^{われ}の上^{じやう}位^ゐに坐^ます。眉^{まゆ}曰^{いは}く。我^{われ}原^{もと}没^{ぼつ}用^{よう}。只^{ただ}是^{これ}没^なけ我^{われ}上^{うへ}に在^ある没^なければ。看^みよ。你^{なんぢ}は還^{また}個^{ひと}の人^{ひと}に像^にんや。

現代語訳

眼が眉毛に言った。

「私には、数多くの役に立つところがある。(それに引き換え、眉毛さんよ)お前なんかは、一つも役に立つところがない。それなのに、私よりも上位に居座っているなんて(おかしくはないか)。」

眉毛は言った。

「わしはなあ、もともと役に立つところなどないさ。ただな、もしもわしが上にいなかったとしたら、見てみな、(眉毛がなくてツルツルの、目玉だけがギロギロとした、その)あんたの顔、そんな顔が(まともな)人間らしい顔に見えますかちゅうねん。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・形体部(三七丁裏)。『新鐫笑林広記』卷之四・形体部(第二九一話、一八丁表裏)。○眼与眉毛曰||眼が眉毛に言った、という意味。「与[^と][^と]」は、この場合、現代中国語の前置詞(介詞)「給[^{gei}][^と]」と同じく「^と」に「^と」の意味であり、「^と」(一緒に)という意味ではない。しかし、このような場合でも、古典漢文の訓読では、一般的に「与」を「と」と訓みながら、「^と」と解釈することになっている。和刻本『訳解笑林広記』においては、すぐ前の話(第

一一九話「鵠舌」^{こうせつ}、巻上、三七丁表七行目)に「何^レ不^レ下^レ (中略) 与^レ我^レ聴^上」^{ごうせつ}とあり、「与」を「に」と訓ませているが、あくまでもそれは例外的な訓読法であり、ここでは「与」という右傍訓が附されていないことから、一般的な訓法に従い、訓読上は「と」と訓み、文脈上は「に」と解釈することによっておく。○我有許多用處^レ私(眼)には、数多くの役に立つところがある、という意味。「用處 [yòngchù]」は「使い道」の意。

「使い道がない」「役に立たない」ことを「没有用處 [méi yǒu yòngchù]」「没用 [mèi yòng]」^{めいよう}と言う。「處」は「処」の正字(旧字体)。左訓「ヤクニタツトガオホシ」(役に立つことが多い)。○没用 [mèi yòng] 役に立たない。左訓「ヤクニタ、ス」(役に立たず)。○看你還像個人哩^レ(眼の上に眉毛がなかったとしたら) あなたの姿を見て、人間らしい顔に見えますか。「還(还) [hái]」は、「それでも、なお」「それでも、まだ」という意味の副詞(やや口語的な語彙)。一般的に、「まだ」と訓読する。

「像 [xiàng]」は、「くのようなだ」「くに似ている」^{よう}の意の動詞(または接続詞)。いずれの用法も、現代中国語と同じ。「個 [gè]」は、「一個 [yí gè]」の「一」が省略された形(序数表現)。「一人の(人)」という意味。「哩 [li]」は、文末の語気助詞。白話小説に頻出する。現代中国語「呢 [ne]」に相当する。日本語に訳すことは難しいが、「くじゃないか」「くだよね」と言うときの語尾「か」「よね」のニュアンスに少し似ている。

補注

この話は、原本『笑林評』^{ぜつえいさんしやう}『絶纒三笑』^{ぜつえいさんしやう}『笑府』、和刻本『笑府』などに類話はない。

余説

本話は、『訳解笑林広記』^{やくげしやうりんくわうき}「形体部」(身体部位に関する話)の第二六話。「形体部」前半に多く収録されていた「身体的な障害を笑う話」ではなく、今回は「身体の特定位」を取り上げた話となっている。前話「過橋嚏」^{かきょうてい}は、特殊な「くしやみセンサ」をもつ男(女性に思われるとクシヤミが出ると思い込んでいる男)の話であったが、本話「争坐」^{せうざ}は、「眼と眉毛という身体部位」を取り扱った話である。

その内容は、眼と眉毛が「座席を争う」というもの。人間の感覚器官の中でも極め

て重要な役目を果たしている「眼」(感覚器官の中核)が、何の役にも立っていない「眉毛」の「下座」^{しもざ}に位置していることに不満を抱き、「眉毛」の野郎に文句を言ったところ、「眉毛」は「でも、眉毛がなくて目玉だけだったら、そんなものはもう人間の顔には見えないじゃるが(宇宙人か何かのような、えげつない顔になるやろが)」と反論した、という話である。

この話の「笑いのツボ」は、「眉毛のない顔は、もはや人間の顔ではない。」という、眉毛の放った最後の一言が、なかなか「穿った」^{うが}表現となっているところにある。「穿った表現」とは、「言われなければ気付かないが、言われてみれば、なるほど」ともその通りだと思える表現」という意味である。

ちなみに、「眉毛のない顔」と言えば、平安時代のお公家^{くげ}さんは、眉毛をすべて剃り落とし、額はかなり上の方に、短い眉をうつつすらと描いていたという話を思い出すのではないか。現代の日本人から見れば、時代劇などで時折見られるそのようなお公家さんの顔も、かなり気持ちの悪いものに映るであろうが、『笑林広記』所載のこの話は、現代日本人の感覚と同様、清朝時代の中国人の目にも、「眉毛のない人間の顔」は、もはや「人間らしい」(像個人)まともな姿には見えなかったということを示す、貴重な歴史資料とすることができるであろう。

また、「眉毛」の気持ちを代弁するという発想自体も、奇抜なものであると言えきであろう。

122 直背(まっすぐな背中の後輩たち)
原文

直背

一 瞎子。一 矮子。一 痞子。吃酒^ム争坐^ム。各、曰。説得^セ大話^ダ的^テ、便坐^{ベン}坐^{セン}頭^{トウ}。
一 一位^ニ。瞎子曰。我^レ目中^ニ無^レ人^ニ。該^ニ我^レ坐^一。矮子曰。我^レ不^レ比^ニ常^ニ「長全音」人^ニ。該^ニ

我レ坐ス。瘡子曰ク、不レ要セ争フコトヲ。 筭シ来レハ、你們ハ都ナ是レ直背「姪輩全音」自然ニ

該ニ讓レ我レニ坐セシム。

書き下し文

直背「直背」
一瞎子。一矮子。一瘡子。酒を吃に坐を争ふ。各曰く。大話を説き得るものは、便ち頭の一位に坐せん。瞎子曰く。我、目中に、人無し。該に我坐すべし。矮子曰く。我常「長と同音」人に比せず。該に我坐すべし。瘡子曰く。争ふことを要せざれ。算し来れば、你們は、都是、直背「姪輩と同音」自然に該に我に讓て坐せしむべし。

現代語訳

目の見えない男と、小人症の男と、背中の曲がったせむし男の三人が、酒を飲むうとして、(誰が上座に座るべきか)座席争いをしていた。三人はそれぞれ、「精一杯大口を叩くことのできた者が上座に座る、ということにしようじゃないか。」と言った。

目の見えない男は言った。

「わしはな、(目が見えないのだから、まさしく)『眼中に人無し』(訳者注:「極めて傲慢である」という意味の成語)「ちゅうもんや。でや。(こんな大口を叩いた)わしが上座に座るべきじゃろ。」

小人症のチビは言った。

「わしはな、(誰よりも背が低いのだから、まさしく)『長人に比せず(「背高のつぼ」とは比べものにならない)』というもんじゃ。つまり、わしは『長人』常人に比せず』『ただ者ではない』ということなのじゃから、(より大きな口を叩いた)わしこそ上座に座るべきじゃ。」

【割注】「長人 [cháng rén]」(背高のつぼ)は「常人 [cháng rén]」(凡人)

と同音である。

背中の曲がったせむし男は言った。

「上座争いは止めなされ。考えてみれば、君たちは所詮、皆『直背(まっすぐな背中の人間)』『姪輩(一代だけ後輩の者ども)』なのだから、当然のこと(一代も年が上の先輩である)わしに上座に譲るべきである、というわけじゃ。」

【割注】「直背 [zhí bèi]」(まっすぐな背中)は「姪輩 [zhī bèi]」(一代だけ下の後輩)と同音である。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部(三七七丁裏〜三八丁表)。『新鐫笑林広記』巻之四・形体部(第二九二話、一八丁裏)。○直背 [zhí bèi] 〓 まっすぐな背中、という意味。中国原本(京都大学附属図書館谷村文庫蔵、乾隆二十六年(一七六一)宝仁堂刊本)和刻本も「直」に作る。「直」は「直」の異体字。なお、現代中国語(簡体字)では「直」を使用する。○瞎子 [xiāzi] 〓 目の見えない人。盲人。差別的なニュアンスがある。日本語の「めくら」(放送禁止用語)に相当。○矮子 [ǎizi] 〓 チビ。身体の小さい人。低身長。小人症(侏儒症)の人。やや差別的なニュアンスがある。左訓「イツスンバウシ」(二寸法師)。○瘡子 [chuāngzi] 〓 佝僂病の人。背骨の湾曲した人。ビタミンDの欠乏による骨格異常とされる。差別語。現代中国語では「駝子 [tuōzi]」と表される。日本語の「せむし」に相当。「せむし」は「背に虫がいる」という誤信に基づく差別語。左訓「セムシ」。○吃酒争坐 [chī jiǔ zhēng zuò] 〓 酒を飲もうとして、(誰が上座に座り、誰が下座に座るべきか)座席争いをした、という意味。和刻本は、「吃」に右傍訓「ノム」(飲む)を附す。中国語の話し言葉で「吃 [chī]」という語は、通常「食べる」と訳されるが、現代中国語でも「酒を飲む」を「吃酒」と表現する場面がある。ちなみに、日本語でも江戸時代以前は「酒をいただく」という意味で「酒を食ぶ」という表現があった。○大話 [dà huà] 〓 大きな話。大法螺。「法螺を吹く」「大口を叩く」ことを「説大話 [shuō dà huà]」と言う。左訓「オホクチ」(大口)。○目中無人 [mù zhōng wú rén] 〓 眼中に人無し(成語)。極めて尊大であり、傲慢なさまを言う。ただし、(ここでは)「めくら」は目が見えないので、視力のない「目の中に人が映らない」というのが表面上の意味である。「めくら」が「目中無人」

という成語を口にすると、別の意味になるといふ洒落。○該我坐 [gāi wǒ zuò] 〓 私 (かみぎ) が (上座に) 座るべきである、という意味。「該 [gāi]」は、「道理・人情から見て、当然…すべきである」という意味を表す助動詞 (能願動詞)。ただし、ここでは接続詞的に用いられている。和刻本は、「まさに…べし」(再読文字) と訓んでいる。○不比 [bǐ bǐ] 〓 「…の比ではない」「…とは比べものにならない」という意味。○常 [cháng] 全音 〓 常人 [cháng rén] は「通常の人」という意味。「常人 [cháng rén]」は「背の高い人」「のっぽ」の意。割注「長全音」は、「常 [cháng]」は「長 [cháng]」と同じ発音である、という意味。「全」は「同」の異体字 (古字)。割注によつて、「常人 (通常の人) と「長人」(背の高い人) が掛詞になつてゐることを指摘しているのである。なお、この割注は、中国原本に存する原注である。また、「不比常人」は「常人離れしている」「ただ者ではない」という意味であり、「不比長人」は「背の高い人とは比べものにならない (背が低い)」という意味である。つまり、「背の低いチビ」は「不比長人 (背の高い人でない)」〓 「不比常人 (ただ者ではない)」だからこそ「上座に座るべきだ」と主張しているのである。和刻本は、「不比常 [長全音] 人」に、左訓「ツネナミノヒトテナイ」(常並の人でない) を附す。○箒来 [sǎn lái] 〓 「計算してみれば」「考えてみれば」という意味。「箒」は「算」の異体字。左訓「タカデ」(高で)。「高で」は「たかだか」「せいぜい」の意 (西鶴『世間胸算用』巻二)。

○直背 [zhí bèi] 〓 「直背 [zhí bèi]」は「まっすぐに伸びた背中」の意 (前出)。背中の曲がった「せむし」の対義語。割注「姪輩全音」は、本文中の語「直背 [zhí bèi]」(まっすぐに伸びた背中) が、「姪輩 [zhí bèi]」(二世世代だけ後輩の者) と同音であることを指摘したもの。「輩」は「輩」の異体字、「全」は「同」の異体字である。この割注も中国原本に存する原注だが、中国原本 (京都大学附属図書館谷村文庫蔵、乾隆二六年 (一七六一) 宝仁堂刊本) は「姪背全音」に作る (和刻本は「姪輩全音」)。ただし、この注に関しては、遠山荷塘による割注「姪輩全音」の方が、語義を理解する上で分かりやすい。なお、和刻本は、「直背」二字に、右傍訓「スグナセナカ」(直ぐな背中)、左訓「ヲヒトモジヤ」(甥どもじや) を附す。「甥ども」という語は、「兄弟姉妹の子である甥の世代の人たち」という意味であろう。○自然該讓我坐 〓 当然のこと、私を上座に座らせるべきである、という意味。「讓 [ràng]」は、「…にくさせらる」という意味の使役動詞。文脈上、ここは「讓る」と訳してもよい。「讓」は「讓

の正字 (旧字体)。使役動詞の用法は、現代中国語「让 [ràng]」と同じ。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶縷三笑』『笑府』、和刻本『笑府』などに類話はない。

余説

本話は、『訳解笑林広記』『形体部』(身体部位に関する話)の第二七話。三者三様の「身体に障害をもつ人」が一堂に会し、酒宴の座席争いをするというもの。登場人物は、「めくら」と「小人」と「せむし」(原文のニュアンスを伝えるため、あえて差別語を使用)の三人であり、その趣向は、最も尊大な大口を叩くことのできた者が上座に座れるというものである。三人は、それぞれ両義性のある言葉 (掛詞) を駆使し、大いに気炎を上げている。

(めくら)「我目中無人」(私は目が見えない 〓 眼中に人無し (傍若無人))

(小人)「我不比長人 (常人)」(私は背高のっぽでない 〓 私はただ者ではない (私はスゴイ))

(せむし)「你們都是直背 (姪輩)」(君たちは皆背中がまっすぐ 〓 君たちは皆私よりも後輩である)

この話の「笑いのツボ」は、実は、身体に障害を持つ三人が、どれだけうまくダジャレを言うことができるかを競っているところにある。ダジャレの巧さという点で各人の言葉を分析すると、「めくら」の放ったダジャレには、文全体として二通りの意味が込められているとはいえず、語彙レベルでは、実は一つも掛詞 (同音異義語) が用いられておらず、言語遊戯的には、やや技巧に欠けると言わざるを得ない。一方、「小人」のダジャレは、「常人 [cháng rén]」「常人 [cháng rén]」という語に掛詞 (同音異義語) が用いられているが、さらに細かく見てみると、「常人」の「人」が同字であり、両義性があるのは「長」「常」の一字だけである。それに対して、「せむし」の放ったダジャレには、「直背 [zhí bèi]」「姪輩 [zhí bèi]」という、全く同じ

発音でありながら、全く意味の異なる文字が二字ともに使用されている。如何に尊大な大口を叩いているかという「大口選手権」における判定基準だけでは、なかなか優劣を定めがたい三者の言葉ではあるが、「ダジャレ選手権」における言語遊戯的な判断基準に従って審査した場合には、客観的に「せむし」の勝利と言えるのである。

だからこそ、本話のタイトルも「直背(姪輩)」となっているのであり、次の話(『訳解笑林広記』第二二三話「疮叔」)においても、同じダジャレをモチーフとした話が採用されているのではなからうか。中国原本『笑林広記』の編者である「遊戯主人」ととっても、和刻本『訳解笑林広記』の施訓者・遠山荷塘にとっても、「直背(姪輩)」というダジャレは、かなりお気に入りのものであったように思われる。

なお、笑話において三者が順番に発言する場合、最後の一人の発言が「オチ」(「笑いのツボ」)になることは、今更言うまでもあるまい。

123 疮叔(せむし男の叔父様)

原文

疮叔

有_ニ疮子_一 赴_ル席_ニ。泰然_{トシテ}上坐_ス。衆客既_ニ齊_ス。自覺_レ不_レ安_カ。復_タ趋_テ下_ニ謙遜_ス。衆客曰_ク。疮_ヲ讀_ム与_大同_ク。叔請_フ上坐_{セヨ}。直_ニ姪_全音_ヲ背_ニ畫_全音_ヲ。怎_レ敢_テ取_ル。

書き下し文

疮叔

疮子_有り。席_に赴_く。泰然_として上坐_す。衆客_既に齊_す。自_ら安_{から}ざるを覚_ゆ。復_た下_に趨_つて謙遜_す。衆客_曰く。疮_を讀_むと大_と同_じ。叔_請請_ふ上坐_{せよ}。直_に「姪_と同音_」背_に「畫_と同音_」。怎_ぞ敢_て取_る。

現代語訳

背中の曲がったせむし男が宴会の席に赴いた。せむし男は、平然とした顔をして、上座に腰を下ろしたが、大勢のお客さんたちが勢揃いすると、(自分が上座に座っているのは、ひよつとしたら分不相応なことではないかと)心配になり、そそくさと下座

の方へ移動して、小さく畏まっていた。(それを見て) 大勢のお客さんたちは、こう言った。

「ねえねえ、父親と同世代の叔父様(「大叔」)よ、どうぞ上座にお座りください。私たちのような、一世代も下の後輩たち(「姪輩」)が、(あなたのような大先輩を差し置いて) どうして上座に座れましょうや。(訳者注:最後の言葉は、掛詞(同音異義語)が用いられているため、次のように聞こえる。「ねえねえ、背中の曲がったせむし男(「疮叔」)よ、どうぞ上座にお座りください。私たちのような、まつずぐな背中の人間(「直背」)が、(あなたのようなせむし男を差し置いて) どうして上座に座れましょうや。)」

【割注】「疮叔[tuo shu]」(背中の曲がった叔父さん)という語は、「大叔[da shu]」(父と同世代で、父親よりは年下の叔父様)という語と、地方の発音では同じである。また、「直背[zhi bei]」(まつずぐな背中)という語は、「姪輩[zhi bei]」(一世代だけ後輩の者たち)という語と、同じ発音である。

【訳者注】右の割注は、中国原本に存する原注(音注)を、和刻本の施訓者・遠山荷塘が部分的に修正したものである。詳細は、以下の語注を参照。

注

○『訳解笑林広記』卷之上・形体部(三八丁表)。『新鐫笑林広記』卷之四・形体部(第二九三話、一八丁裏)。○疮叔[tuo shu] || 「背中の曲がった叔父さん」という意味(後出)。○疮子[tuozi] || 背中の曲がった人。せむし。第二二三話「直背」の語注を参照。○赴席[qu xi] || 宴会に出席する。左訓「フルマヒニ ユク」(振る舞ひに行く)。○泰然[tairan] || 平然としている。泰然自若としている。左訓「ノツシリト」。○上坐[shang zuo] || 上座に座る。○齊[qi] || きちんと揃う。ここでは、宴会の客たちが勢揃いする意。「齊」は「斉」の正字(旧字体)。常用漢字「斉」は「齊」の略字である。左訓「ソロウ」(揃う)。○趋下謙遜[qu xia qianxun] || すばやく下座の方へ向かってこそこそと移動し、小さくなっていた、という意味。趋[qu]は「趨」の異体字。「:」に向かつて、小走りに移動する」という意味の動詞。○疮「讀_ム与_大同_ク」 || 「疮叔[tuo shu]」は、「背中の曲がった叔父さん」の意。割注「讀_ム与_大同_ク」は、「疮」という字は)発音の上では「大[da]」と同じである、という意味。つまり、

「疣叔 [tuó shū]」（背中の曲がった叔父さん）という語は、「大叔」（父と同世代で、父よりは年下の叔父さん）という意味のダジャレに聞こえる、と説明しているのである。なお、この割注は、中国原本にも存する原注であるが、やや字句が異なる。中国原本は「疣 [大土音讀]」（疣 [tuó] は、地方の発音では「大 [dà] と読む。）に作る。ただし、中国原本の割注は、中国語としてやや不自然であるため、和刻本の施訓者である遠山荷塘が、中国刊本の原注を意図的に修正した可能性がある。なお、和刻本は、割注内の「大同」に左訓「オチサマ」（叔父さま）を附しているように見えるが、文脈から判断すれば、割注を挟んだ本文「疣叔」に（普通のため「大叔」という意味に聞こえる、という注意書きとして）左訓「ヲチサマ」（叔父さま）を附したと見るべきであろう。また、和刻本は、「叔」字を、かなり崩れた草書体（第三一話「叔叔」、上巻・一一丁裏一行目第五字と同じ字体）に刻している。○直「姪全音」背「輩全音」怎敢＝「直背怎敢 [zhí bèi zěn gǎn]」は、「まっすぐな背中の私たちが、どうして（上座に座するなどという）畏れ多いことができませんか（滅相もないこととでございませぬ）」という意味。「姪輩怎敢 [zhí bèi zěn gǎn]」ならば、「一世代だけ後輩に当たる若輩者の私たちが、どうして（上座に座するなどという）畏れ多いことができませんか（滅相もないこととでございませぬ）」という意味になる。割注「姪全音」は、「直 [zhí]」は「姪 [zhí]」と同音である、という意味であり、割注「輩全音」は、「背 [bèi]」は「輩 [bèi]」と同音である、という意味。いずれの語も、現代中国語においても完全に同音である。また、「直」は「直」の異体字、「輩」は「輩」の異体字である。なお、これらの割注は、すべて中国原本に存する原注である。和刻本は、割注内の「音」字に左訓「ヲヒドモハ」（甥どもは）を附しているように見えるが、ここも割注を挟んだ本文「直背」に（普通のため「姪輩」という意味に聞こえる、という注意書きとして）左訓「オヒドモハ」（甥どもは）を附したものであろう。また和刻本は、「怎敢」に左訓「ドウイタシテ」を附す。

補注

この話は、『笑府』巻十（第四六二話「疣」）に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府（下）』（岩波文庫、一九八三年二月、一二六～一二七頁）を参照。

『笑府』所収話の原文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と対校すれば、僅

かに文字の異同は見られるものの、ほぼ同文である。

唐本『笑府』第四六二話（明・泰昌元年（一六二〇）頃成立か、巻十・形体部、筑波大学中央図書館蔵本、一三丁表く裏）

疣

有疣子赴席。泰然上坐。衆客既齊。疣子自覺不安。復趨下謙遜。衆客曰。大「疣」叔請上。姪「直」輩「背」怎敢

余説

本話は、『訳解笑林広記』「形体部」（身体部位に関する話）の第二八話。前話に引き続き、身体的な障害をもつ人、「せむし男」を揶揄している。「笑いのツボ」も、前話同様、中国語のダジャレにある。

酒宴の席で、迂闊にも上座に腰を下ろしてしまった「せむし男」を見て、周りのお客さんたちは口を揃えて、こう言った。

「大叔請上坐。姪輩怎敢。（父親と同世代の叔父様よ、どうぞ上座にお座りください。私たちのような、一回りも年下の後輩たちが、上座に座ることなどできませんから。）」

ところが、例によって、この言葉は、次のような全く異なる意味にも聞こえてしまうからこそ面白い。

「疣叔請上坐。直背怎敢。（背中の曲がったせむし男の叔父様よ、どうぞ上座にお座りください。私たちのような、まっすぐな背中の人間たちが、上座に座ることなどできませんから。）」

「疣叔 [tuó shū]」（背中の曲がったせむし男の叔父様）と「大叔 [dà shū]」（父親と同世代の叔父様）、「直背 [zhí bèi]」（まっすぐな背中の人間たち）と「姪輩 [zhí bèi]」（一回りも年下の後輩たち）、これらの語が、それぞれ掛詞（同音異義語）になっているところが、味噌である。

この話は、やはり当代きつての中国語通であった、遠山荷塘好みの話柄と言うべきであろう。

124 路上屁 (道端の屁)

原文

路上屁

昔^シ有^リ三人行^フ令^ヲ。要^ス上^レ山^ニ見^ル一^ノ古人^ヲ。下^レ山^ヲ又^見一^ノ古人^ヲ。半路^ニ見^ル一^ノ物件^ヲ。後^句要^ス三^ツ搥^テ結^ニ。前後^ニ二^ノ句^ヲ。一人^曰ク。上山^ニ遇^フ見^ル狄青^ニ。下^レ山^ヲ遇^フ見^ル李白^ニ。路上^ニ拾^ヒ得^{タリ}一^ノ瓶^ノ酒^ヲ。不^レ知^ス是^レ青酒^カ。是^レ白酒^カ。一人^曰ク。上山^ニ遇^フ見^ル樊噲^ニ。下^レ山^ヲ遇^フ見^ル趙盾^ニ。路上^ニ拾^ヒ得^{タリ}一^ノ把^ノ劍^ヲ。不^レ知^ス是^レ快劍^カ。是^レ鈍劍^カ。一人^云ク。上山^ニ遇^フ見^ル林放^ニ。下^レ山^ヲ遇^フ見^ル賈島^ニ。路上^ニ拾^ヒ得^{タリ}一^ノ個^ノ屁^ヲ。不^レ知^ス是^レ放的^ノ屁^カ。鳥的^ノ屁^カ。「快音噲。鈍音盾。放如字。鳥音搗。放屁謂^ニ之^ヲ搗屁^ト。」

書き下し文

路上の屁

昔^{むかし}三人^{さんにん}令^を行^{おこな}ふ有^あり。山^{やま}に上^{のぼつ}て一^{いち}古人^{こじん}を見^みる。山^{やま}を下^{おり}り又^{また}一^{いち}古人^{こじん}を見^みる。半路^{はんろ}に一^{ひつ}つ物件^{ぶつけん}を見^みるを要^{えう}す。後^ご句^くに總^{すべ}て前後^{ぜんご}二^に句^くを結^{むす}ぶを要^{えう}す。一人^{ひとり}曰^いく。山^{やま}に上^{のぼつ}て狄青^{てきせい}に遇^あひ見^みる。山^{やま}を下^{おり}り李白^{らいへい}に遇^あひ見^みる。路上^{じやうじやう}に拾^{ひろ}ひ得^えたり。一^{いち}瓶^{びん}の酒^{しゆ}を拾^{ひろ}ひ得^えたり。趙盾^{てうとん}に遇^あひ見^みる。路上^{じやうじやう}に一^{いつ}把^への劍^{けん}を拾^{ひろ}ひ得^えたり。知^しらず。是^{これ}快劍^{くわいけん}か。是^{これ}鈍劍^{どんけん}か。一人^{ひとり}曰^いく。山^{やま}に上^{のぼつ}て樊噲^{はんかゐ}に遇^あひ見^みる。趙盾^{てうとん}に遇^あひ見^みる。路上^{じやうじやう}に一^{いつ}把^への劍^{けん}を拾^{ひろ}ひ得^えたり。知^しらず。是^{これ}快劍^{くわいけん}か。是^{これ}鈍劍^{どんけん}か。一人^{ひとり}曰^いく。山^{やま}に上^{のぼつ}て林放^{りんぽう}に遇^あひ見^みる。山^{やま}を下^{おり}り賈島^{かたう}に遇^あひ見^みる。路上^{じやうじやう}に一^{いつ}個^この屁^へを拾^{ひろ}ひ得^えたり。知^しらず。是^{これ}放的^{はうてき}の屁^へか。鳥的^{たうてき}の屁^へか。「快^{くわい}音^{おん}は噲^{くわい}。鈍^{どん}音^{おん}は盾^{とん}。放^{はう}は字^じの如^{ごと}し。鳥^{たう}音^{おん}は搗^{たう}。放^{はう}屁^へは之^{これ}を搗^{たう}屁^へと謂^いふ。」

現代語訳

昔むかし、三人で酒令の遊びをするようになった。(酒令のルールは) 山に登って古人に出会い、山を下りて、また古人に出会う。そして、道の途中で何かを見つけ、次の一句で前後の句を結びつけて総括する、ということにした。

一番目の人が言った。
「山に登って偶然(北宋の武將) 狄青と出会い(上山遇見狄青。)、下山途中に(盛唐の詩人) 李白にばったり出くわした(下山遇見李白。)。そして道端で酒を拾った(路上拾得一瓶酒。)。だがそれは、『青酒』(狄青の酒||青い酒)であるか、『白酒』

(李白の酒||白酒)であるか、分からない(「不知是青酒。是白酒。」)。次に、二番目の人は言った。

「山に登って偶然(劉邦の家臣) 樊噲と出会い(上山遇見樊噲。)、下山途中に(春秋戦国時代の政治家) 趙盾にばったり出くわした(下山遇見趙盾。)。そして道端で劍を拾った(路上拾得一把劍。)。だがそれは、『噲劍||快劍』(樊噲の劍||切れ味の鋭い劍)であるか、『盾劍||鈍劍』(趙盾の劍||切れ味の鈍い劍)であるか、分からない(「不知是快劍。是鈍劍。」)。

そして、三番目の人が言った。
「山に登って偶然(孔子の弟子) 林放と出会い(上山遇見林放。)、下山途中に(韓愈の弟子) 賈島にばったり出くわした(下山遇見賈島。)。そして道端で屁を拾った(路上拾得一箇屁。)。だがそれは、『放的屁』(林放の屁||プウッと放った屁)であるか、『鳥的屁||搗屁』(賈島の屁||プボンとぶつ放した屁)であるか、分からない(「不知是放的屁。鳥的屁。」)。

【和刻本割注】「快[kuai]」は「噲[kuai]」という発音であり、「鈍[du]」は「盾[du]」という発音である。「放[fang]」は、(人名)「林放[lin fang]」の場合も、動詞句「放的屁[fang de pi]」(放った屁)の場合も、どちらの場合も)文字通りの意味である。「鳥[dao]」は「搗[dao]」という発音であり、「放屁[fang pi]」(オナラをする)という語は、「搗屁[dao pi]」(オナラをぶつ放す)とも言う。

【訳者注】右の割注は、和刻本の施訓者・遠山荷塘による訳注であり、中国原本にはない。

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部(二三八丁表裏)。「新鐫笑林広記」巻之四・形体部(第二九九話、二〇丁表)。○行令[king ling]||酒令を行う、という意味。「酒令」とは、酒宴の余興として行われるゲームのこと。「令官[ling guan]」と呼ばれるリーダー(審判役)の決めたルールに従い、詩や詞などを作る。ゲームの敗北者は、罰として酒を一杯飲み干さなければならない。『初刻拍案驚奇』巻二に「是夜賈主兩個。

與同王賽兒。行令作樂。飲酒。愈加熟分有趣。喫得酩酊而散。」(その夜、主人とお客さんの二人は、王賽兒と一緒に酒令の遊びをしながらお酒を飲み、ますます仲良くなくて、ぐでんぐでんに酔っ払ってからお開きとなった。(拙訳)という用例がある。○摠結 [zong jie] ≡ 締めくくる。総括する。「摠」は「總(総)」の異体字。なお、常用漢字「総」は、正字「總」の俗字である。○狄青 [Di Qing] ≡ 北宋の武将・狄青(一〇〇八〜五七年)。字は漢臣。明清小説『万花楼演義』の主人公でもある。○李白 [Li Bai] ≡ 盛唐の詩人・李白(七〇一年〜七六二年)。字は太白、号は青蓮居士。詩と酒を愛した。杜甫とともに中国最高の詩人と並び称せられ、杜甫の「詩聖」に対して、李白は「詩仙」と呼ばれる。○不知是青酒。是白酒。≡ (道端に落ちていた酒が)「青酒」なのか「白酒」なのか、分からない、という意味。「青酒 [qing jiu]」は、「青く濁った酒」の意だが、山中で偶然出会った北宋の武将「狄青の酒」という意味を含む。「白酒 [bai jiu]」は、コーリヤンやトウモロコシから製する蒸留酒のこと。現在中国で飲まれている「白酒」は透明色だが、古代中国においては白く濁っていたと言う。ここでは、下山途中に偶然出会った詩人「李白の酒」という意味を含む。○樊噲 [Fan Kui] ≡ 漢の高祖劉邦の功臣・樊噲(生年未詳)紀元前一八九年)。「鴻門の会」において、剣と盾を帯びて酒宴の席に闖入し、項羽に殺されそうなる劉邦の命を救ったという逸話は名高い(『史記』項羽本紀)。明代小説『西漢通俗演義』(万曆四〇年(一六一二)刊)に描かれている。樊噲が活躍する「項羽と劉邦」の物語は、わが国では、元禄八年(一六九五)刊、和刻本『通俗漢楚軍談』(明代小説『西漢通俗演義』の翻訳)によっても知られていた。○趙盾 [Zhao Dun] ≡ 春秋戦国時代(紀元前七世紀)の晋国の政治家・趙盾(生没年未詳)。○拾得 [shi de] ≡ 「拾う」ことができた「拾った」という意味。「得」は「得」の異体字。中国原本(京都大学附属図書館谷村文庫蔵、乾隆二六年(一七六一)宝仁堂刊本)は正字「得」に作る。○一把劍 [yi ba jian] ≡ 一振りの剣。「把 [ba]」は、刀剣を数える助数詞(量詞)。「劍」は「劍」の正字(旧字体)。常用漢字「劍」は「劍」の略字である。○不知是快劍。是鈍劍。≡ (道端に落ちていた剣が)「快劍」(切っ先の鋭い剣)なのか「鈍劍」(切っ先の鈍い剣)なのか、分からない、という意味。同時に、中国語では「噲 [kuai]」と「快 [kuai]」、「盾 [dun]」と「鈍 [dun]」の二字が、それぞれ同音字であるため、その剣が、山中で偶然出会った古代中国の武人「樊噲 [fan kui]」の剣(「噲劍 [kuai

[kuai]」)なのか、それとも古代中国の政治家「趙盾 [zhao dun]」の剣(「盾劍 [dun jian]」)なのか、はつきりしない、という意味にもなる。○林放 [Lin Fang] ≡ 春秋戦国時代の魯国の人・林放(生没年未詳)。孔子の弟子。『論語』八佾篇に「林放問禮之本(林放は礼の根本についておたずねした。)」(日本語訳は、金谷治『論語』(岩波文庫、一九九九年改訂、五三頁)による)として登場する。○賈島 [Jia Dao] ≡ 中国唐代の詩人・賈島(七七九年〜八四三年)。韓愈(七六八年〜八二四年)に才能を認められた。「推敲」の故事で有名な詩人。○不知是放的屁。島的屁。≡ (道端に落ちていた屁が)「放的屁」(プウッと放った屁)なのか、「搗的屁」(プボンッとぶつ放した屁)なのか、分からない、という意味。なお、中国語では、「島 [dao]」と「搗 [dao]」の二字が同音であるため、そのオナラが、山中で偶然出会った孔子の弟子「林放 [lin fang]」の屁なのか、それとも唐代の詩人「賈島 [jia dao]」の屁なのか、はつきりしない、という意味にも聞こえる。和刻本は、「放的屁。島的屁。」の箇所、左訓「ヒツタヘカ タレタヘカ」(放った屁か、垂れた屁か)を附す。また、和刻本の施訓者である遠山荷塘は、そのことを以下の割注で解説している。○「快音噲。鈍音盾。放如字。島音搗。放屁謂之搗屁。」(割注) ≡ この割注は、和刻本の施訓者・遠山荷塘による訳注であり、中国原本にはない。なお、和刻本は「島音搗」の「搗」を「才十鳥」に誤刻している。

補注

この話は、原本『笑林評』『絶纒三笑』、『笑府』に類話はないが、和刻本『笑府』(明和五年(一七六八)京都刊、半紙本)に、『笑林広記』所載の本文が収録されている。和刻本『笑府』の本文は、以下の通りである。なお、『笑林広記』所収の本話「路上屁」は、『中国笑話選 江戸小咄との交わり』(東洋文庫24、平凡社、一九六四年、二七五頁)、中国古典文学大系59『歴代笑話選』(平凡社、一九七〇年、三六三頁)に、松枝茂夫氏による翻訳が備わる。

和刻本『笑府』第八六話(明和五年(一七六八)京都刊、半紙本、京都大学附属図書館蔵本、巻上、一九丁表〜裏)

昔有_二三人行_レ令_レ要上山_ニ見_一一古人_一下_レ山_ヲ又_レ見_一一古人_一

半路見^ニ一物件^ヲ 後^一句要^ス三總^ニ結^フ 前^一後^二句^ヲ一人ノ曰上
 山^レ遇^レ見^ニ狄青^ヲ下^レ山^ヲ遇^レ見^ニ李白^ヲ路^上拾^得一^瓶ノ酒^ヲ不
 知^レ是^レ青酒^是白酒^{一人ノ曰上}山^ニ遇^レ見^ニ樊噲^ヲ下^レ山^ヲ遇^レ
 見^ニ趙盾^ヲ路^上拾^得一^把ノ劍^ヲ不^知是^レ快劍^是鈍劍^一
 人ノ曰上^レ山^ニ遇^レ見^ニ林^ヲ放^ヲ下^レ山^ヲ遇^レ見^ニ賈島^ヲ路^上拾^得一
 個^ノ屁^ヲ不^知是^レ放^カ的^屁 島^ガ的^屁

また、明治十九年（一八八六年）に「版權免許」を受けた『^一開卷百笑』（蘭厓逸史（岩本吾一）纂譯、金櫻堂梓）に、本話の日本語訳が掲載されている。参考までに、『^一開卷百笑』の訳文も載せておく。引用は架蔵本に拠る。

明治刊本『^一開卷百笑』第八四話（蘭厓逸史（岩本吾一）纂訳、明治十九年（一八八六）版權免許、四二〜四三頁）

三人行^レ令

昔^カ三人^ノ令^ヲ行^フ有^リ 要^スル^ニ山^ニ上^リ 一^古人^ヲ見^ル 山^ヲ下^リ 又

一^古人^ヲ見^ル 半^路一^物件^ヲ見^ル 後^句 要^スル^ニ 前^後二^句ヲ^結ブ^コ

ト^ロ一^人ノ^曰ク 山^ニ上^リ遇^レ見^ニ狄青^ヲ見^ル 山^ヲ下^リ 遇^レ見^ニ李白^ヲ見^ル 路^上
 一^瓶ノ^酒ヲ^拾ヒ^得タ^リ 知^ラズ 是^レ青^酒 是^レ白^酒 一^人ノ^曰ク 山

ニ^上リ 遇^レ見^ニ樊噲^ヲ見^ル 山^ヲ下^リ 遇^レ見^ニ趙盾^ヲ見^ル 路^上一^把ノ^劍ヲ^拾フ^知

ラ^ズ 是^レ快^劍 是^レ鈍^劍 一^人ノ^曰ク 山^ニ上^リ 遇^レ見^ニ林放^ヲ見^ル 山^ヲ下^リ
 遇^レ見^ニ賈島^ヲ見^ル 路^上一^個ノ^屁ヲ^拾ヒ^得タ^リ 知^ラズ 是^レ放^ガ屁^カ

島^ガ屁^カ

余説

本話は、『訳解笑林広記』「形体部」（身体部位に関する話）の第二九話。ここからは、「身体に障害をもつ人の話」ではなく、四話連続で「屁」に関する笑話が続く。

さて、「屁話」の第一話「路上屁」は、「酒令」と呼ばれる「酒宴における言葉遊びのゲーム」が繰り広げられる。この種のゲームは、その都度、参加者の間で細

かいルールが定められるものだが、今回は、次のような四部構成の句を作る、という趣向である。

第一句、山に登って、偶然○●に出会い（上山遇見○●）、

第二句、下山途中に、ばったり□■に出くわした（下山遇見□■）。

第三句、そして道端で△を拾う（路上拾得一個△）。

第四句、だがそれは、●の△であるか、■の△であるか、分からない（不知是

●△。是■△）。

第一句（起句）と第二句（承句）で二人の「歴史上の人物（古人）」に出会い、第三句（転句）で何かを拾い、そして結びの第四句（結句）で、第一、二、三句を総括するような、気の利いた一句を調べて全体を締め括る、というのが、今回の「酒令」のルールとなっている。

そこで、一番目の人は、山で歴史上の人物「狄青」と「李白」に出会い、道端で「酒」を拾う。そして、その「酒」が「青酒」（狄青の酒）青い酒）であるか「白酒」（李白の酒）白（酒）であるか分からない、と締める。

二番目の人は、山で「樊噲」と「趙盾」に出会い、道端で「劍」を拾う。そして、その「劍」が「快劍」（快劍）（樊噲の劍）鋭い劍）であるか「盾劍」（鈍劍）（趙盾の劍）鈍い劍）であるか分からない、と結ぶ。

そして三番目の人は、山で「林放」と「賈島」に出会い、道端で「屁」を拾う。そして、その「屁」が「放的屁」（林放の屁）プウッと放った屁）であるか「島的屁」（搗的屁）（賈島の屁）プボンとぶつ放した屁）であるか分からない、と締め括ったのである。

三者三様の結句に見える「シメ」の一言には、中国語による掛詞（同音異義語）が用いられているため、外国人には分かりにくいかもしれないが、中国語ネイティブにとつては、このような言葉遊びこそ、ダジャレとして気が利いており、（特に「才

ヤジ」には)面白くて堪らないのである。

本話の「笑いのツボ」は、このような手の込んだ「酒令」の規則を守りながら、それぞれ「シメ」の一句で気の利いたまとめ方をするところにある。特に、この話全体の「笑いのツボ」は、やはり最後の一句「不知是放的屁。鳥的屁。」にある。つまり、中国語による掛詞を駆使しながら、それが孔子の弟子・林放の屁であるか、「推敲」の故事で知られる賈島の屁であるか分からない、と言いながら、その屁が「プウ」と放った屁(放的屁)であるか、それとも「プボンとぶつ放した屁(搗的屁)」であるか、そのどちらかは分からない、と上手く下品にまとめている点にあり、かくも下品な言い回しにこそ、本話の「笑いのツボ」はある。このような言い回しは、中国語としては低俗かつ下劣なものではあるのだが、中国語を学ぶ外国人にとっては、かつて極めて高度な語学力と幅広い語彙力が要求されるものである。

このように考えると、この話は、中国語学者としては超一流であったが、その人や品性という点においては、時として問題視されることもあった、和刻本の施訓者である遠山荷塘という人の、やや品性には欠けるものの、だからこそ、その温かく愉快な、そして色っぽい彼の人柄や人生そのものを偲ばせる、興味深い一話となっているようにも思われる。

125 卓面響 (テーブルから音が出る)

原文

卓面响

一人方ニ陪客。偶撒一屁。自覺愧甚。欲掩飾之。乃假將指頭擦桌面作响聲。客曰。還是第一聲像得緊。

書き下し文

卓面响

一人方に客に陪す。偶一屁を撒ず。自ら愧ること甚きを覚え。之を掩

飾せんと欲し。乃ち假に指頭を將て。卓面を擦し響声を作す。客曰く。還是第一聲像得て緊なり。

現代語訳

ちようどお客さんの相手をしている最中に、思わずプウッと屁を放いた。恥ずかしくて堪らず、その場を取り繕おうとして、指先でテーブルの表面をキュッキュッと擦りつけ、プリププリププツとオナラっぽい音を鳴らした。すると、お客さんは言った。「やっぱりね、最初の音が、いちばんオナラっぽかったよん。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部(二三八丁裏)。『新鐫笑林広記』巻之四・形体部(第三〇二話、二〇丁裏)。○卓面响 [huo mian xiang] || テーブルの表面(または裏面)で(指先を擦りつけて)音を鳴らす、という意味。「卓 [huo]」は、本文中の語「卓 [huo]」(テーブル、机)と同意。日本語(常用漢字)では「卓」と表記される。ただし、現代中国語では、「卓 [huo]」(卓越した、優れた)と「卓 [huo]」(卓 [huo])は区別される。「卓」は使用しない)。なお、「卓 [huo]」は、本来「舟を漕ぐ権(オール)」の意。「响 [xiang]」は、「響」の俗字。なお、現代中国語では「响」を正字(簡体字)とする。○陪客 [pei ke] || 「陪 [pei]」は、「連れ添う」「お相伴をする」「お供をする」の意の動詞。本話を収録する和刻本『解顔新話』は、「陪 [pei]」を「倍 [pei]」と誤刻している。「陪」と「倍」は、日本語では同じ音読みの文字であるが、中国語では、両者は発音も語義も異なる。『解顔新話』の本文は「補注」に掲載する。和刻本『訳解笑林広記』は、「陪」字に左訓「シヤウバン」(相伴)を附す。○撒一屁 [sa yi pi] || 「屁を(一発)放つ」「オナラをこく」という意味。和刻本は、「撒」に左訓「ヒル」(放る)を附す。○自覺愧甚 [zi jue kui shen] || 我が恥が恥ずかしくて堪らなかった、という意味。和刻本は、「自ら愧る 甚きを覚え」と訓読しているが、一般的な訓読法に従って「こと」を補い、「自ら愧ること 甚きを覚え」と書き下した。○欲掩飾 [yu yan shi] || 「オナラをしたことを」隠そうとして、という意味。「掩飾 [yan shi]」は、「こまかす」「覆い隠す」「取り繕う」の意の動詞。「飾 [shi]」は「飾」の古字。なお、和刻本は訓点を微妙に誤刻している。正しくは、「欲掩飾之」とすべきところ。

○乃假将指頭擦桌面作响聲||そこで、指先をテーブルに擦りつけ、(オナラみたいな、ブツブツという)音を鳴らして、という意味。「假」は、ここでは「偽って」という意味。本物のオナラではなく、指先でオナラのような「偽りの」(音を鳴らす)というニュアンスが込められている。和刻本は、「擦」に左訓「サスル」(擦る)、「响声」に左訓「ヒ、キ」(響き)を附す。○還是第一聲像溥緊||やはり最初の音が抜群に(本物のオナラの音に)似ている、という意味。「還是」[haisi]は、「やつぱり」という意味の副詞。現代中国語と同じ。「像」[xiang]は、「似ている」という意味の動詞(または形容詞)。「溥」[pō]は「得」[de]の異体字。中国原本(京都大学附属図書館谷村文庫蔵、乾隆二十六年(一七六一)宝仁堂刊本)は正字「得」に作る。「得」は、程度補語の構文を作る構造助詞。「緊」[jin]は、「甚だしい」「ひどい」「すごい」という意味の程度副詞。「很」[hen]「甚」[shen]などと同義。「像得緊」[xiang de jin]は、「動詞「像」+構造助詞「得」+程度補語「緊」という構文を作っている。つまり、「指先で鳴らしたプウという音と、本物のオナラのプウという音とが」『似ており(「像」)』その似ている程度が『甚だしい(「緊」)』というのが直訳。これを意識すれば、「抜群に似ている」となる。同様の構文は、例えば、『新鐫笑林広記』第三四三話「獸子」に「苦到不苦。惹得滿口涕得緊着哩。」(苦いって言うほど苦くはないぞ。ただ口の中が滅茶苦茶渋くて堪らんのだ)。 (拙訳)、同第一七五話「罵」に「要罵要打的人多。得緊在那裡。」(あそこには、怒鳴りつけたり殴りつけたりする人が大勢)だったがえしして(拙訳)という用例がある。和刻本『訳解笑林広記』は、「還是第一聲像溥緊」全体に、左訓「マダシモハジメノガ、ヨックニテヲリマス」を附す。この左訓は、もはや語注ではなく、一文全体の翻訳となっている。

補注

この話は、『絶纒三笑』巻二時笑・調語四六(第二九一話「椅响」)、『笑府』巻十(第四七九話「椅响」)に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(下)』(岩波文庫、一九八三年二月、一三九―一四〇頁)を参照。

『絶纒三笑』『笑府』所収の本文は、以下の通りである。『絶纒三笑』と『笑府』はほぼ同文であり、『笑林広記』の本文は、『絶纒三笑』『笑府』より口語的になっているが、内容は同一である。例によって、『絶纒三笑』には、他書に見られ

ない評語(編者のコメント)が添えられている。拙訳を附す。

唐本『絶纒三笑』第二九一話(明・万曆四四年(一六一六)序、巻二・時笑・調語四六、東京大学文学部蔵本、二二丁表裏)

椅响

一人方陪客。偶撒一屁。愧甚欲掩之。乃連以指磨椅面作响。客曰。還是頭一聲像。

反爲所覺。無可置面矣。小人敗露。亦復似此。

椅子で音を鳴らす

ある人、ちよūdお客さんの相手をしている最中に、思わずオナラが出てしまった。恥ずかしくて堪らなかったので、オナラをごまかそうとして、指で椅子の表面をこすり、プウツ、プウツと、立て続けに音を鳴らしてみた。すると、お客さんは言った。

「やつぱりね、最初の音が、いちばん本物っぽいよん。」

(編者のコメント)(余計なことをしたために、最初の音だけが本物のオナラである、と)かえって感づかれてしまうと、穴があいたら入りたかろう。小人の悪事が露見するのも、これと似たようなものである。

唐本『笑府』第四七九話(明・泰昌元年(一六二〇)頃成立か、巻十・形体部、筑波大学中央図書館蔵本、一八丁裏)

椅响

一人方陪客。偶撒一屁。愧甚。欲掩之。乃連以指磨椅面作响。客曰。還是第一聲像。

また、『笑府』所収の本文は、和刻本『笑府』(明和五年(一七六八)京都刊、半紙本)に収録され、『笑林広記』所収の本文は、和刻本『解顔新話』(寛政六年(一七九四)序)に、日本語訳を附して掲載されている。そしてさらに、『解顔新話』所収の日本語訳は、小咄本『即当笑合』(寛政八年(一七九六)序)に、「江戸小咄」と

して、そっくりそのまま再録されている。

和刻本『笑府』『解顔新話』『即当笑合』の本文を、それぞれ京都大学附属図書館蔵本によって示す。ただし、『即当笑合』は『解顔新話』の板木を流用したものであり、『解顔新話』の和訳部分と全く同一である。

和刻本『笑府』第八八話(明和五年(一七六八) 京都刊、半紙本、京都大学附

属図書館蔵本、巻上、一九丁裏)

一人方_ニ陪_レ客_ニ偶_ニ撒_ニ一_ニ屁_ヲ愧_ル甚_ク欲_シ掩_レ之_ヲ乃_リ連_リ以_テ指_テ磨_シ椅_ノ

子_ヲ作_シ聲_ヲ客_ノ曰_ク還_シ是_レ第_一聲_ノ像_也

「椅子」に「キヨクロク」という左訓が附されているが、「曲泉(緑)」とは、もと禅寺で用いられた法会用の椅子のこと。江戸時代には、それと似たような形の腰掛けが、出産時にも使用されたという(『誹風柳多留』第五四編「十月目に曲祿へ乗る山の神」)。「像」の訓は、原本のまま。

和刻本『解顔新話』第四二話「桌面响」(寛政六年(一七九四)序、京都大学附

属図書館蔵本、上巻、二丁表(裏)

桌面响

一人方_ニ倍_レ客_ニ偶_ニ撒_ニ一_ニ屁_ヲ自_レ覺_ル愧_ヲ甚_ク欲_シ掩_レ飾_ニ

之_ヲ乃_リ假_シ将_ニ指_ニ頭_ニ擦_ニ卓_ニ面_ニ作_シ响_ノ聲_ヲ客_ノ曰_ク還_シ是_レ

第_一聲_ノ像_ノ得_ル好_シ

一人 客の 倍 をする 偶 屁を撒る 愧 でならず 掩飾 と

欲て 指の 頭で 卓子の 面を 擦て 响と云せる 客の

いはくなるほど 第一声に 好像しました

和刻本『即当笑合』第八二話「桌面响」(寛政八年(一七九六)序、供与大学

附属図書館蔵本、巻四、一四丁表(裏)

桌面响

一人 客の 倍 をする 偶 屁を撒る 愧 でならず 掩飾 と

欲て 指の 頭で 卓子の 面を 擦て 响と云せる 客の
いはくなるほど 第一声に 好像しました

『解顔新話』には、誤字・誤訳・訓点の欠落など、問題となる箇所が数多く見られるが、その詳細については、拙稿『解顔新話』全注釈(平成二一〜二三年度、科学研究費補助金・成果報告書「中国笑話集と日本文学・日本語との関連に関する研究」課題番号二一五二〇二二五、一一六〜一九頁)を参照されたい。

なお、小咄本『はつわらい』(天明八年(一七八八)頃序、小本一冊、四四丁、全三十七話、『嘶本大系』第十二巻所収)にも、次のような類話がある(島田大助氏の御示教による)。

小咄本『はつわらい』(天明八年(一七八八)頃序)
取はづし

下女のおさんが、竈のまへで芋をうみながら、ブウとの取はづし。はつと思つてうしろを見れば、久介がいたゆへ、そしらぬ顔に、口まねにてまぎらかさんと、口にてブウブといふと、久介後で、なる程。おさんどのハ、口まねが上手だ。はじめしたのに少しもちがわぬ

この小咄では、下女がオナラをごまかすために口真似でオナラの音を鳴らしているが、まったく同じ話である。年代的には、和刻本『笑府』(明和六年(一七六八) 京都刊、半紙本)による影響を考へることも可能であろう。

余説

本話は、『訳解笑林広記』「形体部」(身体部位に関する話)の第三〇話。前話「路上屁」に引き続き、「屁」に関する笑い話の第二話である。

「屁話」の第二話「桌面響」は、客人を接待している最中に、ブウつとオナラをしてしまい、それを取り繕おうとして、指先でオナラのような音を鳴らしてみたら、かえって客人にそれと感づかれ、「やっぱり最初の一発が、いちばんオナラっぽ

かったよ。」と言われてしまった、という話。

この最後の台詞は、見方を変えれば、「最初の一発以外は、すべてオナラの音には聞こえない」と言っているようなものであり、屁を取り繕おうとして余計なことをしたために、本物の屁が最初の一発だけであったことを改めて確認させる羽目に陥った、というところが可笑しいのであろう。

だとすれば、この話の「笑いのツボ」は、『絶纒三笑』の編者のコメントに指摘されている通り、「余計なことをしたために、かえって悪事が露見した(反爲所覺。無可置面矣。小人敗露。亦復似此)」点にある、ということになろう。

126 不嘿(音を出してしまふ)

原文

不嘿

各、行酒令ヲ要ス。嘿飲ニセシヨラ。席中有ニ撒スル屁者。令官曰。不嘿。罰ヌ一杯ヲ。其ノ人曰。是屁响。令官曰。又不嘿。再罰ヌ一杯。舉坐為メニ之カ。大笑。令官曰。通座皆不嘿。各、罰ヌ一杯。

書き下し文

嘿せず
各、酒令を行ふ。嘿飲せんことを要す。席中、屁を撒ずる者有り。令官曰く。嘿せず。一杯を罰す。其の人曰く。是、屁の響なり。令官曰く。又嘿せず。再び一杯を罰す。挙坐之が為に大笑す。令官曰く。通座皆嘿せず。各一杯を罰せん。

現代語訳

(酒宴に出席した)それぞれの人が、「一言もしやべらずに、黙って酒を飲む」という酒令(酒宴の席におけるゲーム)を行うことになった。すると、出席した人のかに、プウッと屁を放いた者がいた。酒令のリーダー(審判役)は言った。

「はい、音を出したので、ルール違反です。罰として、酒を一杯飲みなさい。」

(屁を放いた)その人は言った。

「いや、今のはオナラが鳴ったのです(しゃべったわけではないので、ルール違反ではありません)。」

リーダーは言った。

「ほら、また音を出しました。ルール違反です。さらにもう一杯、罰として酒を飲みなさい。」

それを聞いて、居合わせた人たちは、皆大笑いした。リーダーは言った。

「この場にいらっしゃる各々方、全員音を出しましたので、全員ルール違反です。各人、罰として、それぞれ酒を一杯ずつ飲みなさい。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・形体部(三九丁表)。『新鐫笑林広記』卷之四・形体部(第三〇四話、二二丁表)。○不嘿 [bu mo] ≡ 「黙っていることができる」「音を立ててしまふ」という意味。「嘿 [mo]」は、「黙っている」「話をしない」意の動詞。「黙 [mo]」と同じ。和刻本は、本文中の「不嘿」に左訓「ダマラヌ(黙らぬ)」を附す。○行酒令 [xing juling] ≡ 酒令を行う、という意味。「酒令」は、酒宴の余興として行われるゲームのこと(第一二四話「路上屁」参照)。「令官 [lingguan]」と呼ばれるリーダー(審判役)の決めたルールに従ってゲームは進行する。ゲームの内容は、出席者全員に順番に詩詞を作らせるものや、「猜拳 [cai quan]」と呼ばれる「拳遊び」など、多岐にわたる。和刻本『訳解笑林広記』第二四三話「譬字令」、同第二四四話「不知令」にも「酒令」に関する話がある。○嘿飲 [mo yin] ≡ 「黙って酒を飲む」という意味。語義としては、「口を利かずに(酒を)飲む」「話をせずに(酒を)飲む」という意味になるはずだが、「令官」は「嘿」という語を「しゃべらないだけでなく一切の)音を立てずに、無音のまま、完全な静寂を守りながら、酒を飲む」という意味に捉えている。だからこそ、「屁を放いた」(撒屁)だけでも、酒令のルール違反になるという仕掛けである。左訓「ダマツテノム(黙って飲む)」。○令官 [lingguan] ≡ 酒令というゲームを取り仕切るリーダー(審判役)のこと。左訓「トウトリ(頭取)」。○罰一杯 [fa yi bei] ≡ 罰杯として酒を一杯飲ませる、という意味。「酒令」における罰ゲームである。○是屁响 [shi pi xiang] ≡ (ざっきの音は)オナ

ラが鳴ったのですよ、という意味。「响[xiǎng]」は、「響[xiǎng]」の俗字。なお、現代中国語では「响」が正字(簡体字)として使用される(前出)。○舉坐[jǔ zuò] 〓 「その場に居合わせた人全員」「満座の人」という意味。「舉座[jǔ zuò]」と同意。「舉(舉)」は「舉」の正字(旧字体)。常用漢字「舉」は「舉」の略字である。○為之[wéi zhī] 〓 「このために」「これがために」という意味(文語)。「為[wéi]」は「…のために」という意味の副詞。和刻本は、「為」字の右上に、この文字の発音が去声(第四声)であることを示す声調符号を附している。これは、平声(第二声)の「為[wéi]」(動詞「なす」と区別するための一種の音注である。なお、この音注は、和刻本の施訓者・遠山荷塘による訳注であり、中国原本にはない。○通座[tōng zuò] 〓 満座の人。「舉坐[jǔ zuò]」と同意。

補注

この話は、『絶纒三笑』巻二時笑・調語四七(第二九二話「嘿」)、『笑府』巻十(第四八二話「嘿」)に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(下)』(岩波文庫、一九八三年二月、一四一頁)に備わるが、誤解を招きかねない微妙な一文が含まれているため、利用する際には注意を要する。

『絶纒三笑』『笑府』の原文は、以下の通りである。本文を対校すれば、『絶纒三笑』と『笑府』はほぼ同文、『笑林広記』の本文は、それらをより具体的に、より口語的に書き直したものと見えよう。『絶纒三笑』には拙訳を添える。編者のコメントを除けば、『笑府』とほぼ同文であるから、松枝訳との微妙な違いを確認してほしい。

唐本『絶纒三笑』第二九二話(明・万曆四四年(一六一六)序、巻二時笑・調語四七、東京大学文学部蔵本、二二丁裏)

嘿

行酒令要嘿乾。一客撒屁。糾之曰。不嘿。其人欲辨。方開口。復糾曰。又不嘿。

糾撒屁以不嘿。未奇也。味全在又字

音を出さない

「音を立てずに酒を飲み干す」という酒令(宴席におけるゲーム)を行った。すると、一人の客人が屁を放した。(酒令のリーダー役を務めている審判が)「はい、音を出したので、ルール違反です。」と、客人のミスを決めたところ、その客人は、

「いやいや、今のは…」

と言いつつしようとしたが、今度は客人が口を開いた途端、

「ほら、また音を出したので、ルール違反です。」

と、再び客人のミスを決めた。

(編者のコメント)屁を放して、プウッと「音を出した」ために、酒令のルール違反を咎められたというのは、まあそれほど珍しいことではない。この話の面白さは、すべて「ほら、また」という一語に係っている。

唐本『笑府』第四八二話(明・泰昌元年(一六二〇)頃成立か、巻十・形体部、筑波大学中央図書館蔵本、一九丁表)

嘿

或行酒令。要嘿乾。一客撒屁。糾之曰。不嘿。其人欲辨。方開口。復糾曰。又不嘿。

松枝茂夫氏は、『笑府』所収話の冒頭を、「ある人、酒令を行なう時、物をいわずに乾杯するようにと命じた。(或行酒令。要嘿乾。)」と訳している(岩波文庫『全訳笑府(下)』一九八三年二月、一四二頁)。しかし、この訳文では、何か他のゲームをしている最中に、口を開いてはいけない、黙って乾杯しなければならない、と命令しているかのような誤解を与えかねない。中国語の原文「行酒令。要嘿乾。」は、「酒令をしながら黙って飲め」と言っているのではなく、『黙って乾杯する(嘿乾)』という酒令(ゲーム)を行った」という意味なのである。

酒宴の余興として行われるゲーム(酒令)のルール説明をする場合、『訳解笑林広記』では、第一二四話「路上屁」(『新鐫笑林広記』第二九九話)のように、「昔有三人行令。要上山見一古人。(中略)後句要摠結前後二句。」という表現が用いられ

る。本話「不嘿」に見られる「行酒令。要嘿乾。」という一文も、これと全く同じ構造になっているのである。

また、『笑府』所収の本文は、和刻本『笑府』（明和五年（一七六八）京都刊、半紙本）に収録されている。和刻本『笑府』の本文を、京都大学附属図書館蔵本によって示す。

和刻本『笑府』第八九話（明和五年（一七六八）京都刊、半紙本、京都大学附

属図書館蔵本、卷上、一九丁裏）

或行酒令要嘿乾一客撒屁糾之曰不默其人欲辨

方開口復糾曰又不默

余説

本話は、『訳解笑林広記』「形体部」（身体部位に関する話）の第三一話。第一二四話「路上屁」、第一二五話「桌面響」に続いて、「屁」に関する笑い話の第三話である。

「屁話」の第三話「不嘿」は、前々話の「路上屁」と同様、酒宴の余興として行われるゲーム「酒令」を扱った話となっている。

さて、今回の「酒令」のルールは、「誰ひとり一言もしやべってはいけない」というもの。ところが、誰かがプウッと屁を放ってしまう。審判役の「令官」は、これを聞き漏らさず、厳密にルールを適用し、屁を放いた人に罰杯を飲ませる。しかし、屁を放いた当人は、確かに立派に屁は放いたものの、「一言もしやべってはいけない」のだから、ルール違反には当たらないと主張する。すると今度は、言い訳をしたこと自体がルール違反に該当し、さらにもう一杯、罰杯を叩くことになる。そしてさらに、そのやりとりを聞いていた周りの人たちが一斉に大笑いしたため、一同揃って罰杯を叩く仕儀とは相なった、という話である。

この話の「笑いのツボ」は、誰もしやべってはいけないのに、屁を放ただけで「不嘿」（誰ひとり一言もしやべってはいけない）というルールに抵触し、さらに「是屁

响（しやべったのではなく、屁が鳴っただけだ）」と弁解したために、またもやルール違反になり、それを聞いていた周りの人たちの発した「わはははは」という笑い声が、またしても罰を受けることになるという、余計なことをしたために、次から次へと新たなルール違反を犯してしまう可笑しさにあるのであろう。

その意味では、前話と同じように、やはり『絶纒三笑』の編者によって示されたコメントの通りである、ということになる。

糾撒屁以不嘿。未奇也。味全在又字

屁を放いて、プウッと「音を立てた」ために、酒令のルール違反を咎められた、というのは、まあそれほど珍しいことではない。この話の面白さは、すべて「ほら、また」という一語に係っている。

ただ、少し注意しておいてよいのは、『笑林広記』本文には、『絶纒三笑』『笑府』に描かれている話の「続き」が附加されている、ということであろう。放屁の言い訳をしたために罰杯を叩いた後、その場に居合わせた人たちが大笑いする、という最後の展開部は、『絶纒三笑』と『笑府』には見られないものである。『笑林広記』の編者は、『絶纒三笑』『笑府』の話に少し手を加え、宴会の席での酔っ払いたちの賑やかな様子を、より生々しく活写している、ということができようか。楽しく酒を飲みながら、どんちゃん騒ぎをしている、少々下品な下ネタ好きの大人たちの、リアルな宴会風景が目には浮かぶ。

127 怕冷（寒がり）

原文

怕冷

或問世間何物不怕冷。曰鼻涕。天寒即出。又問何物最怕冷。曰
尻。纒離窟。又向鼻孔裡鑽進。

書き下し文

冷を怕る。或ひと問ふ世間何物か冷を怕れざる。曰く鼻涕。天寒ければ即ち出づ。又問ふ何物ぞ最も冷を怕る。曰く屁なり。纒かに窟醫を離れて。又鼻孔裡に向て鑽進す。

現代語訳

ある人が質問した。

「世の中で、寒さを恐れないものと言ったら何でしょうか。」

答えて言う。

「それは鼻汁でしょう。寒いとき、すぐにピューツと飛び出すのですから。」

【訳者注】鼻汁は、寒くなると鼻の穴から外に出る。言い換えれば、どんなに気温が低くても、鼻汁は寒さを恐れていないからこそ、無邪気に外に飛び出してくると考えられる、ということである。

すると、今度は次のように質問した。

「それでは逆に、最も寒さを恐れるものと言ったら何でしょうか。」

答えて言う。

「それは、オナラでしょうね。オナラは、尻の穴から出た途端、すぐ鼻の穴に向かってピシューツと突き刺さるのですから。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部(三九丁表)。『新鐫笑林広記』巻之四・形体部(第三〇五話、二二丁表)。○怕冷[pa'leŋg] 寒さに弱く。寒がりである。「怕[pa]」は「怖がる」意。現代中国語と同じ。和刻本は、本文中の「怕冷」二字に左訓「サムカル」(寒がる)を附す。○不怕冷[bu pa'leŋg] 寒さに強い。寒がりではない。左訓「サムガラヌ」(寒がらぬ)。○鼻涕[bai] 鼻水。鼻汁。現代中国語と同じ。左訓「ミツパナ」(水洩)。○天寒即出[ti'en han kei] 寒いとき、すぐ(鼻汁が)出る、という意味。和刻本の訓点に従った訓読「天寒即出ス」は、やや不自然であるよ

うに思われるため、私に訓み換え、「天寒ケレバ即チ出ヅ」(寒くなると、すぐに出てくる)と書き下した。○纒[sa] 〓「わずかに」「今しがた」「極めて短い時間のうちに」という意味の副詞。和刻本は右傍訓「マサニ」を附すが、通常は「わずかに」と訓む。○窟醫[kei] 〓尻。けつ。左訓「シリ」(尻)。○又向鼻孔裡鑽進[wa] (屁が肛門から出た後) 今度は、鼻の穴に向かって、突き刺さるように入り込む、という意味。「鼻孔[bikōng]」は、「鼻の穴」の意。「裡[li]」は、名詞の後に付いて「…の中」という意味を添える接尾辞(方位詞)。和刻本は「裡」の左側を「ネ(しめすへん)」に作る。今、中国原本(乾隆二十六年(一七六一)宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵本)の表記により改めた。「鑽進[zuān jìn]」は、「錐で穴を空けるように、潜り込む」という意味。「鑽[zuān]」は、「錐で穴を空ける」意の動詞。現代中国語(簡体字)では「钻」と表記する。「進[jìn]」は、動詞の後に置かれ、その動作が外側から内側に入り込んでいくニュアンスを添える方向補語。現代中国語と同じ。和刻本は、「孔」に左訓「アナ」(穴)、「鑽進」に左訓「ハイリコム」(入り込む)を附す。

補注

この話は、中国原本『続笑林評』第二四八話(内題「続笑林評」、外題「笑林評下」)に類話がある。『続笑林評』の本文は、以下の通りである。語彙や表現は部分的に異なるが、内容は同じである。拙訳を添える。

唐本『続笑林評』第二四八話(万曆三十九年(一六一一)序、内題「続笑林評」、

外題「笑林評 下」、国立公文書館(内閣文庫)蔵本、八〇丁裏)

兩人間論世間何物為不怕冷。一人曰鼻涕寒甚即、

出是不怕冷者。又問何物是怕冷者。曰屁纒離屎窟、

便向衆人鼻裡乱鑽。是最怕冷者。

凍夫涕可憐紙上屁可咲也。

世の中で最も寒さを恐れないものは何か、という問題について、二人は論じ合っていた。一人が言う。

「鼻汁というものは、寒さが厳しくなると、すぐに外に飛び出します。これは、寒さを恐れていないと言えるでしょう。」

「それでは、寒さを恐れているものとは何でしょう。」

「屁というものは、尻の穴から出た途端、一目散に大勢の人の鼻の中に突き刺さります。これは、最も寒さを恐れていると言えるでしょう。」

(編者のコメント) 寒さに凍え(愛情にも飢え)ている夫が垂らす鼻水は哀れむべきものであり、紙の上に放たれる屁(のように臭い陳腐な文章)は笑うべきものである。

【訳者注】右のコメントは、「鼻水」と「屁」に託(かこ)けて、妻の尻に敷かれている哀れな夫(おそらくは「烏龜」[wugui]と)と呼ばれる寝取られ亭主(主)に同情の念を示しつつ、屁のように臭い文章しか書けない「腐儒」[furu] (腐れ儒者)を揶揄(やゆ)しようとしているのであろう。

なお、『笑林広記』所収話は、『中国笑話選 江戸小咄との交わり』(東洋文庫24、平凡社、一九六四年、二七五頁)、中国古典文学大系59『歴代笑話選』(平凡社、一九七〇年、三六四頁)に、松枝茂夫氏による日本語訳が備わる。

余説

本話は、『訳解笑林広記』「形体部」(身体部位に関する話)の第三二話。第一二四話「路上屁」、第一二五話「卓面響」、第一二六話「不嘿」に続いて、「屁」に関する笑い話の第四話である。屁のような話がいつまで続くのかと思われそうだが、和刻本『訳解笑林広記』に収録されている「屁話」は、これで最後である。ただし、中国原本『新鐫笑林広記』巻四・形体部には、和刻本よりもさらに多い、計七話の「屁話」が収録されている。

さて、「屁話」の第四話「怕冷」は、非常にシンプルな話である。世の中で、最も寒さに強いものは「鼻汁(鼻涕)」であり、最も寒さに弱いものは「屁(屁)」であると云う。その意は、「鼻汁」は、外がどんなに寒くてもズルズル出るし(「天寒即出」)、「屁」ときたら、寒さを恐れるあまり、「尻から出たら、あつという間に、

一目散に鼻の穴の中に飛び込んでいく(「纒離窟醫。又向鼻孔裡鑽進。»)というわけである。

この話の「笑いのツボ」は、尻の穴から出た屁が、矢のように速く、そして勢いよく、鼻の穴に突き刺さるさまを、面白可笑しく上手に戯画化したところにある。もちろん、「それが、寒さを恐れるあまり、」つまり「世界で一番、寒さに弱いせいで」すばやく鼻の穴に滑り込む、などという牽強附会な「こじつけ」方も、実に微笑ましく、そのような表現技法も、またこの話を面白く感じさせる一つの要素になっている。

128 小卵(小さな男根)

原文

小卵 一人命^レ妻^ニ做^シ鞋^ヲ而^シ小^卵怒^テ曰^ク。你^チ當^ニ小^ニ不^シ鞋^上面^ニ。偏^ニ小^在鞋^上面^ニ。妻亦^タ怒^テ曰^ク。你^チ當^レ大^ニ不^シ鞋^上面^ニ。偏^ニ大^在這^隻脚^上。イコソト

書き下し文

小卵 一人、妻に命じて鞋を做しめ、而して小なり。怒て曰く。你、当に小にすべきは小にせずして、偏に小なること、鞋子上面に在てず。妻、又怒て曰く。你、当に大にすべきは大にせずして、偏に大なること、この隻の脚上に在てず。

現代語訳

ある男、妻に靴を作るよう命じたところ、そのサイズが小さすぎたため、怒って言った。

「お前ときたら、小さくしなければならぬところは大きいくせに、選りに選って靴だけは小さいんだな。」

すると、妻もまた怒って言った。

「あんたこそ、大きくなければならないところは小さいくせに、選りに選ってこの足だけは大きいんだね。」

注

○『訳解笑林広記』巻之上・形体部(三九丁表裏)。『新鐫笑林広記』巻之四・形体部(第三一三話、二二丁裏、二三丁表)。○小卵 [xiao jǔan] 小きなペニス。「卵 [lǔan]」は、「卵子」(女性生殖器)という意味もあるが、俗語では「睾丸」「男根」(男性生殖器)という意味で用いられる。○鞋 [xié] 鞋。現代中国語と同じ。左訓「クツ」(靴)。○偏小在鞋子上面 小さい方がよいところは小さくないくせに選りに選って、靴だけは小さい、という意味。「偏 [piān]」は、「わざと」「かえって」「意固地になつて」という意味の副詞。相手の期待や客観的状况に敢えて逆らうニュアンスをもつ。現代中国語と同じ。和刻本は、「偏ニ小在ニ鞋子上面ニ」と施訓しているが、「偏に小」という訓読はやや不自然であるため、一般的な漢文訓読法に従って「こと」を補い、「偏に小なること」と書き下した。また、和刻本は、「偏」に左訓「イヨジト」(意固地と)を附し、「在」字に右傍訓「ライテス」(於いてす)を附す。「在」を「在てす」と訓むのも珍しいが、あり得ない訓ではない。普通は和刻本『笑府』(明和五年(二七六八)京都刻、半紙本)のように、「在り」と訓む。和刻本『笑府』の本文は「補注」に掲げる。なお、和刻本の左訓に見える「意固地」という語は、やや熟さない言い回しだが、「意固地になつて」という気持ちを表しているのである。○偏大在這隻脚上 大きい方がよいところは大きくなくせに選りに選って、この足だけは大きい、という意味。「隻 [zhì]」は「脚」など棒状のものを数える助数詞(量詞)。現代中国語(簡体字)では「只」と表記される。

補注

この話は、『笑府』巻十(第四七二話「問卵(又)」)に類話がある。『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(下)』(岩波文庫、一九八三年二月、一三四〜一三五頁)を参照。『笑府』所収の本文は、以下の通りである。『笑林広記』本文と対校すれば、僅かに文字の異同がある。

唐本『笑府』第四七二話(明・泰昌元年(一六二〇)頃成立か、巻十・形体部、筑波大学中央図書館蔵本、一六丁表裏)

問卵

一官升職歸。謂妻曰。我的官又大些了。妻曰。官大。不知此物也大些否。官曰。奶々。左右我的大。你也大了。又一人命妻造鞋而小。媪曰。你當小不小。偏小在鞋子上。妻答曰。你當大不大。偏大在脚上。

なお、『笑府』所収の本文は、和刻本『笑府』(明和五年(一七六八)京都刊、半紙本二巻一冊)に収録されている。和刻本『笑府』所収の本文を、京都大学附属図書館蔵本によって示す。

和刻本『笑府』第一三三話(明和五年(一七六八)京都刊、半紙本、京都大学附属図書館蔵本、巻下、八丁裏)

一人命妻造鞋而小。媪曰。你當小不小。偏小在鞋子上。妻答曰。你當大不大。偏大在脚上。

また、明治十九年(一八八六年)に「版權免許」を受けた『開卷百笑』(蘭厓逸史(岩本吾一)纂譯、金櫻堂梓)に、本話の日本語訳が掲載されている。参考までに、『開卷百笑』の訳文も載せておく。引用は架蔵本に拠る。

明治刊本『開卷百笑』第八三話(蘭厓逸史(岩本吾一)纂訳、明治一九年(一八八六)版權免許、四二頁)

夫婦争論

一人妻二命ジテ鞋ヲ造ラシム而シテ小ナリ怒ツテ曰ク爾チ當ニ小ナルベキ小ナラズ偏ヘニ小ナルコト鞋子上ニ在リ妻答ヘテ曰ク爾チ當ニ大ナルベキ大ナラズ偏ヘニ大ナルコト脚上ニ

在リ

評 宜シク代ユルニ足ヲ以テスベシ

余説

本話は、『訳解笑林広記』「形体部」(身体部位に関する話、全三三話)の最終話。ここまで「屁」の話が四話続いてきたが、「形体部」を締め括るのは、男女の生殖器に関する痴話である。

内容が内容だけに、他言は無用であろう。本話では、男女の生殖器が足と靴に喩えられている。

遠山荷塘が編集した和刻本『訳解笑林広記』には、原本『新鵜笑林広記』全十二巻のうち、巻六「閨風部」(全八八話)だけが、一卷まるごと削除されている。「閨風部」とは、男女の性に関する話ばかりを集めたものであるから、編集者の意図として、あまりにも直接的な「下ネタ話」は意識的に削除したのであるかと考えられるが、そういう編纂意図があったとするならば、本話「小卵」が削除を免れ、しっかりと収録されているということに、少々意外な気がしないでもない。

しかし、この手の「下ネタ話」は、中国笑話集にとつて、否、古今東西、世界中の笑話集にとつて、避けては通れぬ、そして誰しもが心の奥底で、やはり少しほくそ笑んでしまうような、普遍的な話柄であろう。ただ、江戸時代の教養人にとつて、この手の話を採録し、書物仲間の承認を得た上で、曲がりなりにも「漢籍」(本来は学術書として扱われる書籍)として出版することは、それ相応の覚悟と勇気が必要だったに違いない。そして、そのような気持ちは、今も昔も、本稿の注釈者にとつても、変わらない。

殊裏部(生まれつき一風変わった人の話)を集めた部門)
129 作揖(拱手の御辞儀をする)

原文

殊裏部

作揖

両親家相ニ遇フ于途ニ。一ハ性急也。一ハ性緩也。性緩ナル者、長揖シテ至リ地ニ。口中ニ謝シテ曰ク。新年拜シテ節ヲ奉擾シ。元宵觀燈ヲ又奉擾。端午看龍舟ヲ。中炆玩月ヲ。重陽賞ス菊ヲ。節節奉擾。未ダ曾テ報答セ。愧不レ可言。及テ説畢テ而起ツニ。已ニ半晌也。性急ナル者、苦ミ其ノ太煩シキヲ。早先避ケ去ル。性緩ナル者、視テ之ヲ不見ヘ。問テ人曰ク。敝親家は幾ヶ去リ、人曰ク。看燈ノ之後、就チ不見ヘ了。已ニ去テ大半年矣。

書き下し文

殊裏部

揖を作す

両親家相に相遇ふ。一は性急なり。一は性緩なり。性緩なる者、長揖して地に至り。口中に謝して曰く。新年節を拜して奉擾し。元宵燈を観る。又奉擾。端午龍舟を見る。中秋月を遊ぶ。重陽菊を賞す。節節奉擾。未だ曾て報答せず。愧ぢ言ふべからず、説き畢て而して起つに及て。已に半晌なり。性急なる者、其の太だ煩しきを苦み。早く先避けて去る。性緩なる者、之を視れども見えず。人に問て曰く。敝親家は幾時去りうるぞ、人曰く。看燈の後。就ち見えず。已に去て大半年なり。

現代語訳

嫁の父親と婿の父親の二人が、ぼったり道端で出くわした。一人はせっかち、一人はおっとり。

さて、おっとりした方が、拱手の御辞儀をしながら、地面に届くかと思われるほど深々と頭を下げ、口の中でモゴモゴと御礼を述べた。

「新年の御挨拶のみぎり、たいへん御馳走になりました。そしてまた、元宵節(旧

曆一月十五日)の折、牡丹灯籠を見物いたしました折にも、たいへん御馳走になりました。それからですね、端午の節句(旧曆五月五日)の折に、龍舟(ペーロン)競漕を観戦いたしました折にも、そして、中秋節(旧曆八月十五日)にお月見をいたしました折にも、いよいよ重陽節(旧曆九月九日)に菊のお花を愛でました折にも、それぞれ節句ごとに、いつもいつもたいへんな御馳走に与っております。それなのに私の方は、未だに大したお返しができおりませんこと、まことにお恥ずかしい限りでございます。」

このように、かくも長々しい口上を述べ終わり、ふと顔を見上げたそのときには、すでに半日ばかり経過していた。せっかちな相手は、くだらぬ挨拶にうんざりして、とつくの昔におさらばしていたのである。おっとりした男は、相手の姿が見えぬので、「わたくしの親戚のあなたの方は、いつごろ行つてしまわれたのでございましょうか。」と訊ねたところ、次のような返事が返ってきた。

『(元宵節の折、旧曆一月十五日に)牡丹灯籠を見物いたしましたときにも』

注

○『訳解笑林広記』卷之上・殊菓部(四〇丁表)。『新鐫笑林広記』卷之五・殊菓部(第三二二話、一丁裏)。○殊菓部[zhu bǐng bù] ≡ 「生まれつき一風変わった人の話」を集めた部門。「殊[zhu]」は、「通常とは異なる」意。「菓[guǒ]」は、「持つて生まれたもの」「天性」の意。『笑府』卷六「殊菓部」に同名の部門がある。中国刊本『新鐫笑林広記』には「殊菓部」として九一話収録されているが、和刻本はそのうちの三三話を採録している。なお、遠山荷塘は、和刻本『訳解笑林広記』卷之上「譯解笑林廣記目次」(二丁表)において、「殊菓部」を「癡婿 呆郎ノ類 天賦錯配ノモノ、可笑コトフアツム」(馬鹿な婿、間拔けな奴、または生まれつきおかしい人間に関する笑い話を収録する)と説明している。○作揖[zuo yi] ≡ 拱手の礼を行う、という意味。「拱手の礼」は、両手を胸の前で合わせ、敬意を表すること。明清時代の中国における御辞儀。○親家[qīngjiā] ≡ 婚姻によって生じた両家の親同士の呼称。嫁の親と婿の親が、互いに「親家[qīngjiā]」「親翁[qīngwēng]」などと呼び合う。この意味の場合、「親[qīng]」は、通常の「親[qīn]」とは異なる音で読まれる点に注

意。○長揖[cháng yī] ≡ 両手を組み合わせ、胸の前で上下に動かす中国の旧式礼法。標題「作揖[zuo yi]」と同義。ここでは「長揖至地」とあるので、両手を合わせたままの状態を腰を曲げ、両袖の裾が地面に届くまで、深々と頭を下げている、ということ。○拜節[bai jie] ≡ 節句の挨拶をする、という意味。「節句」は、中国語で「佳節[jiā jié]」と言う。「拜」は「拜」の正字(旧字体)。常用漢字「拜」は「拜」の略字である。○奉擾[feng rao] ≡ 御馳走になる、という意味。左訓「オセワナリマシタ」(御世話になりました)。なお、和刻本は、「奉」字の下にレ点を附し、「奉擾」としているが、このレ点は誤刻であると思われるため、削除した。○元宵[yuánxiāo] ≡ 旧曆一月十五日の「元宵節[yuánxiāo jié]」のこと。現代中国においても、「元宵節」には「元宵」と呼ばれる「餡入り饅頭」を食べる風習がある。○觀燈[guān dēng] ≡ きれいに飾り付けられた灯籠(日本の提灯のようなもの)を見て楽しむ、という意味。「元宵節」のお祭りの行事。中国原本(乾隆二十六年(一七六一)宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵本)も和刻本も、「觀」字の左上を「共」のような形に刻している。今、コンピュータによる入力可能な常用漢字「觀」で代用した。なお、元宵節の灯籠については、仮名草子『伽婢子』卷之三「牡丹灯籠」(寛文六年(一六六六)刊)の記述が非常に参考になる。○端午[duānwǔ] ≡ 旧曆五月五日の「端午節[duānwǔ jié]」のこと。日本でも「端午の節句」として今に伝わる。○龍舟[lóngzhōu] ≡ ドラゴンボート。船首に龍の頭を象った、スピード競技用の細長いボート。明清時代の中国では、端午の節句にボートレースが開催された。また、江戸時代以来、長崎でも、旧曆の五月五日と六日に同様のボートレースが開催された。「ドラゴンボート」レースは、東アジア・東南アジア諸国一帯において、今なお行われており、今日の日本では、長崎・沖縄・相生(兵庫県)で開催されている。長崎では「ペーロン競漕」、沖縄糸満では「ハーリー」、兵庫県相生市では「ペーロン祭」と呼ばれている。「ペーロン」とは、相生市によれば「白龍[báilóng]」の中国音「バイロン」がなまったものとされるが、「飛龍[fēilóng]」「划龍[hualóng]」「扒龍[pāilóng]」「爬龍[páilóng]」という語に基づくという説もある。長崎に伝わったのは福建地方の風習であり、福建ではこの種の舟を「爬龍船[páilóng chuán]」と呼んでいることから、この話が、長崎・沖縄の「ペーロン」「ハーリー」の語源と考える説が有力である。なお、広東地区では、今日これを「扒龍船」と称する(「爬」「扒」は同音字)。和刻

本『訳解笑林広記』は、「龍舟」に左訓「パイロン」を附す。また、『甲子夜話』巻七「九」に、次のような記述がある。「長崎にパイロンと云ふことあり。是は漢土の競渡なり。崎俗は競船と書す。(中略)年々定日、五月五日六日両日にして、朝五つ前に始まり、夕は暮に及んで止む。」(東洋文庫306『甲子夜話1』、中村幸彦・中野三敏校訂、平凡社、一九七七年四月、一一六～一一七頁)。さらに、『清俗紀聞』(寛政十一(一七九九)年刊)には、福建地方の「龍船」「福建競渡船」に関する詳細な図解説明があるので、紹介しておく(巻一、一七丁裏～一九丁裏、引用は九州大学附属図書館蔵本による。東洋文庫62『清俗紀聞1』、中川忠英著、孫伯醇・村松一弥編、平凡社、一九六六年三月、図版二六～二八頁、本文四三～四七頁参照)。「朔日より六日迄江湖南湖ある地方へ数艘の竜船を浮へ競渡す船は長さ五六間幅程艦に竜頭艦に竜尾を造り船の全体に竜鱗を画き都て彩色を加へ竜の水上に浮たる勢に倣る表に表に牌樓あり(割注)是を竜門といふ」其上に涼傘を竖て四方に旗数本を竖列ね次に亭を儲其上にも涼傘有亭の兩脇に欄干を構足に旗数本を並べ大旗一本竜尾の上に斜に挿傾色々々。○中炆 [zhongqiu] 旧暦八月十五日の「中秋節 [zhongqiu jie]」のこと。現在の日本においても、「中秋の名月」として月見をする風習が伝わっている。「炆」は「秋」の本字。○重陽 [chongyang] 旧暦九月九日の「重陽の節句」のこと。陽数の極である「九」が二つ重なる日(九月九日)であることから言う。また「菊の節句」とも言う。○節節 [jie jie] それぞれの節句ごとに、という意味。和刻本は、「節」字の「たけかんむり」を「くさかんむり」に作り、さらに「くさかんむり」を左上に小さく刻している(異体字)。中国原本(乾隆二六年(一七六一)宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵本)は正字「節」に作る。○報答 [bao da] 御馳走になったことに対する(お返しをする。返礼をする。「答」は「答」の異体字。○愧不可言 [kui bu ke yan] 何とも言えないくらいに恥ずかしい、という意味。○半晌 [ban shang] 原義は「半日」。「あまりにも長い時間」を表す誇張表現として用いられる。左訓「ハントキ(半時)。「半時」は、江戸時代以前の日本で用いられた時間の単位。「一時」は現在の「約二時間」、「半時」は現在の「約一時間」に相当する。○視之不見 [shi zhi bu jian] 視れども見えず、目は開いていたはずだが、(心がここになかったため)気がつかなかった、という意味。『大学』章句伝七章「心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味。(心ここに在らざれば、視れども見えず、聴け

ども聞こえず、食らえどもその味はひを知らず。)」による。「視而不見」という語は、「よく注意していなければ、視ても見えない、聴いても聞こえない」「不注意のため気づかない」という意味の成語として用いられる。現代中国語でも、「視之不見、聴之不聞」「視而不見、聴而不聞」などと言う。和刻本は、「視_レ之_二不見_一」と施訓するが、文意により訓点を改め、さらに「見」の「へ」を規範的な歴史的仮名遣い「見え」に改めて書き下した。○蔽親家 [bi qingjia] 見たくしの姻戚の方は、という意味。「蔽 [bi]」は、謙遜の自称「わたくしの」という意味。「親家 [qingjia]」は前出。○是幾皆去的 Ⅱいつ行ってしまったのですか、という意味。「皆」は「時」の古字。「幾時 [jishi]」は、現代中国語「什么时候 [shenme shihou]」(いつ)の文語表現。「是」は、過去にあつた出来事を取り立てて言う強調構文。「(：は) したのです」という意味を表す。現代中国語と同じ。この文では、「幾時去(いつ行った)」という出来事を取り立てて強調している。なお、和刻本は、文末の「的」を「ウルソ」と訓読しているが、これは一般的な読み方ではない。古典的な訓読法に対応できない「白話」語彙に対する遠山荷塘の工夫であろう。○看燈之後 Ⅱ(旧暦一月十五日の元宵節に飾られる)灯籠を見た後、という意味。「燈」は「灯」の本字。和刻本は、「後」字の「ぎょうにんべん」を「さんずい」に作る(異体字)。中国原本(乾隆二六年(一七六一)宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵本)は正字「後」に作る。○大半年 [da ban nian] 半年余り。半年以上。左訓「ハンネンアマリナリ(半年余りなり)。

補注

『笑林広記』所収の本話は、中国古典文学大系59『歴代笑話選』(松枝茂夫訳、平凡社、一九七〇年五月、三六四～三六五頁)、現代教養文庫767『中国笑話集』(村山吉廣訳編、社会思想社、一九七二年十二月、二一五～二一六頁)に翻訳があり、東洋文庫24『中国笑話選』(松枝茂夫・武藤禎夫編訳、平凡社、一九六四年八月、二七七頁)に、この話の日本語訳として江戸小咄『笑顔はじめ』第二話「長口上」の本文が掲載されている。また、東洋文庫24『中国笑話選』の注に、「十返舎一九『おしやべりの客饗応』(落咄見世開・文化十三)は、これの換骨奪胎したもの。」「という指摘がある。『落咄見世びらき』(文化三年(一八〇六)正月序)は、『噺本大系(第十四巻)』(武藤禎夫編、東京堂出版、一九七九年八月)に翻刻が備わる。

この話は、中国刊本『絶纓三笑』巻一時笑・澹語一八(第一八話「性緩」)、朝鮮刊本『鍾離胡蘆』に類話がある。『絶纓三笑』『鍾離胡蘆』の本文は以下の通りである。『絶纓三笑』の引用は、東京大学文学部蔵本により、『鍾離胡蘆』の引用は、『朝鮮所刊中国珍本小说叢刊8』(孫遜・朴在淵・潘建國編、上海古籍出版社、二〇一四年一〇月)所載の影印による。いずれも内容は概ね同じだが、文章は僅かに異同がある。『絶纓三笑』には拙訳を添えておく。なお、韓国・高麗大学の崔溶澈氏の研究により、朝鮮刊本『鍾離胡蘆』は、『絶纓三笑』が中国で刊行されて間もなく、僅かに文字の修正や語注を加えた上、朝鮮国内で板行されたものであることが分かっている。『鍾離胡蘆』については、『訳解笑林広記』全注釈「第二二〇話「過橋噓」の補注を参照されたい。

唐本『絶纓三笑』第一八話(明・万曆四四年(一六一六)序、巻一、時笑・澹語一八、東京大学文学部蔵本、一二丁表裏)

性緩

兩親翁一性急、一性緩。相遇于途而揖。性緩者因揖而謝其禮意之綱叠曰。正月承親家如何。二月又承親家如何。通數至十二月終。乃起。則親家已去遠矣。駭曰。親家幾時去了。旁人曰。正月間已去了。二月間已去了。施者倦矣謝者未厭。

おっとりした性格

嫁の父親と婿の父親は、一人はせっかちな性格であり、もう一人はおっとりした性格であった。

この二人、道端でばったり出会い、(お互いに両袖の中に手を入れて)拱手の礼を交わした。おっとりした性格の父親は、両袖を上げ、頭を下げたまま、感謝の気持ちを表しながら、のらりくらりと長々しい口上を述べた。「正月には、姻戚の方々から御丁寧な御挨拶を賜りまして」云々だの、「二月には、こ

れまた姻戚の方々から御丁寧な御挨拶を賜りまして」云々と、一月の挨拶から始まって、一つ一つ順番に月を数え、十二月に至って、ようやく挨拶は終わった。そうして、やつとのことで頭を上げたときには、相手の姻戚筋の爺さんは、とつくの昔に立ち去って、もうその場にはいなかった。こちらの爺さんはびっくりして、

「あんりまあ、姻戚の爺さんは、いつ立ち去ってしまったのじゃ。」と訊ねたところ、そばにいた人は、こう言った。

「正月と二月の間には、もうすでに立ち去ってりました。」

(編者のコメント) 御礼を言われる人の方は、もういい加減うんざりしているのに、御礼を言う人の方は、未だに御礼を言い足りない、ということである。

朝鮮刊本『鍾離胡蘆』第六話(一六二二年刊、三丁表裏、『朝鮮所刊中国珍本小说叢刊8』孫遜 主編、朴在淵 潘建國、二〇一四年一月、五〇六頁)

性緩

兩親家「俗言查頓也」一性急、一性緩相遇於途而作揖性緩者因揖而謝其禮意之綱叠曰正月承親家如何二月又承親家如何通數至十二月終乃起身則性急親家去已久矣駭曰親家幾時去耶 傍人曰二三月間已去了

朝鮮刊本『鍾離胡蘆』に附された「俗言查頓也」という割注は、朝鮮時代の文人

による語注であり、「親家」という語が、「俗に言う『查頓』のことである。」という意味を表している。なお、「查頓」という語は、現在も韓国人や朝鮮族の間で使用されている「查頓」(姻戚関係によって生じた親同士の呼称)という生きた朝鮮語(固有語)である。つまり、この語注は、漢字表記はされているものの、朝鮮語(固有語)による解釈(翻訳)が示されたものであり、江戸時代の日本における「カタカナ」書きの「左訓」や「ルビ」と同等の価値を有するものである。東アジア文化圏における

漢文訓読の歴史を考える上で、極めて興味深い事例であると言えよう。

また、本話は、和刻本『笑林広記鈔』(安永七年(一七七八)刊、半紙本一巻一冊)に、伊丹椿園による日本語訳が収録され、小咄本『笑顔はじめ』(天明二年(一七八二)頃序、小本一冊)に、『笑林広記鈔』に基づく小咄が備わるほか、小咄本『落咄見世びらき』(文化三年序、小本一冊)に、場面設定を変えた同工異曲の小咄が掲載され、さらには、津阪東陽による漢文笑話集『訳準笑話』(文政七年(一八二四)刊、大本一巻一冊)にも、文章を文言体の漢文に書き換えた、漢作文のお手本としての笑話テキストが採録されている。

右に挙げた作品それぞれの原文は、以下の通りである。『笑林広記鈔』の引用は京都大学附属図書館蔵本に拠り、『笑顔はじめ』は東京大学総合図書館・霞亭文庫蔵本(公開画像データ)、『訳準笑話』は架蔵本に拠るが、『笑林広記鈔』と『訳準笑話』は『嘶本大系』第二十卷(東京堂出版、一九七九年七月)に影印が備わり、『笑顔はじめ』は『嘶本大系』第十二卷(東京堂出版、一九七九年五月)に翻刻が備わる。また、『落咄見世びらき』の引用は、『嘶本大系』第十四卷(東京堂出版、一九七九年八月、二〇四頁)所載の本文に拠る。

和刻本『笑林広記鈔』第二七話(安永七年(一七七八)刊、半紙本、京都大学附属図書館蔵本、一一丁裏〜一二丁表)

作揖 ナスイツツ

兩親家 途中ニテ相逢 一人ハ 性 緩 一人ハ性急

ナリ 緩ナル者 長揖シテ 頭ヲ地ニツケ謝シテ

曰 新年拜節ニ行テ奉擾ニナリ元宵 燈ヲ見

ニマイリテ 又奉擾ニナリ 端午ニ龍舟ヲ看 中秋

月ヲ 玩ビ 重陽菊ヲ賞シ 節々奉擾ニナリテ 未

報禮ヲナスス 愧イルニ堪タリト 靜ニ説畢テ 頭ヲ上

レハ巳ニ半响アマリ 性急ナル者タヘ 難テ早ク 避去テ見

サレハ驚キ 傍人ニ問テ曰 敝親家 幾時ニ去シヤ 傍

人ノ曰 端午ノ時ニ去タレハ 巳ニ半年バカリニナレリ

訳者注：「緩」の右傍訓「ダン」は、原文のまま。「カン」の誤記であろう。

「暖」と混同したのであろう。

訳者注：「揖」の右傍訓「イツ」は、原文のまま。「揖」の漢字音は「イフ」。

小咄本『笑顔はじめ』第二三話(天明二年(一七八二)頃序、小本、東京大学総合図書館霞亭文庫蔵本、二七丁表〜二九丁表)

長口上

途中で 二人行あふ 一人ハ

大の性急 一人ハとんだ 気

長にてさてく 久しぶりにて

御目にかゝりました 誠に

当春の礼に参りました時ハ

大きに御ぞうさに成まし お

雛まつりにも長座いたし

端午にハ大きな機嫌でかえ

りまして 花火見物にも いろ

く御馳走なされ 九月の

菊見には別て御もてなし

かれ是御礼の申上よう事

もこさりませぬと 頭を地

につけ 述べれども 挨拶も

ない故 天窓を 上ッて見れ

バ 誰も居ぬ はてふしぎと

供につれたる 小僧にきけバ

「ハイむかふの 旦那様ハ 端午

の時に 御帰りなされまし

たから モウ 半年も たち

ませう

なお、『笑顔はじめ』所収話は、小咄本『十千万両』(天明六年(二七八六)序、二七丁表)二九丁表、京都大学文学部・頼原文庫蔵)に再録されている。

小咄本『落咄見世びらき』第一話(文化三年(一八〇三)正月、十返舎一九序)

○おしやべりの客饗応

ある所に、とんだおしやべりの女房、客ひとり見つけると、手まへのいふことばかりいつてゐるくせにて、おりしも正月のことなれば、かどぐちより礼者、「ハイ、御慶申入ます 女ぼう「これハく福右衛門さま。サアおあがりなさいまし ふう右「イヤ、今日ハ遠方へまいりますと、出て行そふに(老オ)するを、むりにとらへてひきあげ、女ぼう「マアくよふござります。お盃でも出しませう。そしてマア、どなたさまも御きげんよふござりますか。ほんに、わたくしの方からハ御無沙汰ばかり。アノおふくろさまハまだおたつしやか。おやしきのお姉さまも、さぞ御せいじんでございませう。手まへにかまけて、おたづねも申ませず、マア御らうじませ。此やうに子どもにばかりたく(老ウ)さんで、正月そうくから、ヤレ、たこをかつてくれるの、イヤ、はこ板がほしいのなんのとせがみます。二月になると初午で、王子さまや太郎さまへつれてゆけのなんのかのと。三月ハまたひなまつりで、それハくたいいていのことじやございませぬ。それから四月になりますと、どふまいつた、こうまいつたと、ひとりしやべりあるゆへ、礼者はらをたて、あいさつもせず、(二オ)こそくくにごてかへりしをしらず、女ぼうハ火ばしにて灰をつゝきながら、「そして五月になりますと、おきゝなさいまし。かしわもちだの、イヤのぼりだのと、大きハぎをやりまして。六月のお天王さま。やうくしまつたとおもふと、じきに七月。サアお精霊さまのこしらへでと、いひさして、ふつときがつき、ヲヤ、福忍もんさまハどいへござつた。コレ小ぞう。そこにあながら、なぜ(二ウ)おとめ申さぬ。そしてマア、いつおかへりなすつたぞといふと、小ぞう「ハア、たしか四五月ごろにおかへりなさいました

和刻本『訳準笑話』第三六話(文政七年(一八二四)刊、大本、架蔵本、七丁表)

婢子饒舌。人至輒輟業。便便弄鬚不已。隣婦問之。過從。婢進說時令。歷叙俗節。聒絮蟬連。主婦不耐。煩。遂假寐。及寤。不見客。問之。婢曰。方立幘縛。綰之頃。既已去矣。

訳者注：改行位置、行頭のレ点など、すべて原本のまま。

訳者注：「**■**」の二字は、「言(こんべん) + 「褌」の右側」 + 「言(こんべん) + 「盃」」。

津阪東陽による漢文笑話集『訳準笑話』所収話の現代語訳(拙訳)は、以下の通りである。

ある下女、たいへん差し出がましく、おしやべりであった。誰かがやると、その都度、仕事の手を休めて、滔滔と無駄口を叩いてばかりいた。

お隣の奥さんが、通りすがりに「御無沙汰しております」などと挨拶をする、下女がズカズカとしゃしゃり出て、時候の挨拶を始めるのだが、細々とした節句の挨拶を一つ一つ並べ立て、ペペラペペラと贅言を弄するものだから、ついに奥様は、その鬱陶しさに耐えきれず、ウトウトとうたた寝をしようという始末。ふと目を覚まし、気づいたときには、お隣の奥さんの姿は見えない。「あれ、奥様は。」と訊ねたら、下女は言った。

「端午の節句のみぎり、鯉のぼりを揚げて、粽(藺草で)グルグル巻きにしておりました頃には、もうすでに立ち去っております。」

『訳準笑話』所収話は、『絶纓三笑』『笑府』『笑林広記』に基づきつつ、登場人物や場面設定を変更し、文章を大幅に書き換えているが、「無駄な挨拶が長すぎて、途中で相手がいなくなってしまう」というモチーフは同一である。ただ、その文体は、

中国笑話集のものと比べれば、かなり異質なものとなっている。概して、明清時代に編集された中国笑話の文体は、地の文に「文言」と呼ばれる書き言葉を使用し、会話文に「白話」と呼ばれる話し言葉を用いている。そして、近世中期（一八世紀半ば）の日本では、唐話学（現代中国語学）の流行と相俟って、「白話」文学作品として、中国笑話が大流行したのだが、江戸時代後期の儒者、津阪東陽（二七五八—一八二五）による『訳準笑話』の文体は、そのような「白話」的要素が、極力削除されているところに特徴がある。『訳準笑話』の文体は、地の文はもちろんだが、中国笑話集では「白話」で書かれていた会話文を、地の文と同じく「文言」で記述している。それはおそらく、本書が、近世中期の「白話」熱も収まった近世後期に出版されたものであると同時に、表向きは、あくまでも「漢文による文章作成教本（例文集）」として編纂された『訳準笑話』という書物が、模範的な例文を示すという教育的意図を強く意識したためであろう。近世後期の儒者に要求された漢学的素養とは、もはや「白話」（現代中国語）による会話や作文の能力ではなく、やはり「文言」による作文や作詩の能力だったからであろう。

余説

本話は、『訳解笑林広記』「殊稟部」の第一話である。「殊稟」とは、直訳すれば「奇妙な生まれつき」という意味であり、概ね「生まれつき頭がどうかしている人の笑い話」が収録されている。

「殊稟部」第一話「作揖」は、「生まれつき」異常なまでに「おっとりした」男の話。子ども夫婦の親同士が道端でばったり出会い、軽く挨拶を交わして通り過ぎると思いきや、異常なまでにおっとりしたこの男は、新年早々に御馳走になったときの御札を述べ、一月十五日の元宵節、五月五日の端午の節句、八月十五日の中秋節、九月九日の重陽節に至るまで、延々と長々しい御札を述べ続ける。相手のせつかな男の方は、そのような「かったるい」話には付き合っていられないので、挨拶の途中で立ち去ってしまう。それに気づかぬ「おっとり」男が、「あれ。いつの間に。」と訊ねると、「二月十五日の挨拶あたりには、すでに姿が見えなくなっておりますので、もうかれこれ半年ばかりになりましたよ。」と答えたという話である。

この話の「笑いのツボ」は、第一に、日常的にありがちな冗長で煩わしい時候の挨拶

に対して、気の短い人ならば、うんざりしてすぐに立ち去ってしまうだろうという、いかにもありそうな「あるある話」としての面白さにあり、第二に、「あれ。いつの間に。」という質問に対する最後の一言「もうかれこれ半年ばかり。」というボケた言い方にあるのであろう。

蛇足ながら、「ボケ」とは、聞き手に「そんなアホな。」と思わせる「すつとぼけた」発言のことである。

『絶纒三笑』所収の類話「性緩」も、朝鮮王朝時代の文人が『絶纒三笑』に少し手を加えて出版した『鍾離葫蘆』所収の「性緩」も、『笑林広記』の比較的自由な和文訳である『笑林広記鈔』「作揖」も、和文訳『笑林広記鈔』を小咄の文体に書き換えた『笑顔はじめ』「長口上」も、小咄本『落咄見世びらき』所収の「おしやべりの客饗応」も、そしてさらには、津阪東陽という江戸時代後期の儒者が文言体の漢文に書き直した『訳準笑話』所収話も、いずれもこれら二つの要素は、しっかりと話の中に取り込まれている。

日朝中三国の合計七種の類話には、せつかな男が挨拶の途中で立ち去る、そのタイミングの違いがある。中国笑話集『絶纒三笑』と『笑林広記』においては、新年の挨拶から始まって、「元宵節（一月十五日）」の御札を述べた段階で、早くも立ち去っている。ところが、朝鮮刊本『鍾離葫蘆』においては、「性急」な男は「二三月間」の時点で立ち去っており、和刻本四種『笑林広記鈔』『笑顔はじめ』『落咄見世びらき』『訳準笑話』所収話においては、新年の挨拶から始まって、「端午の節句（五月五日）」の時点でやっと立ち去っている。つまり、一月一日から一月十五日までの挨拶を聞いてうんざりした中国人に対して、朝鮮刊本に登場する「性急」な男は、二月と三月の間に愛想を尽かし、和刻本に登場する「せつかな男」は、五月五日までの挨拶を、辛抱強く聞いてやっているのである。

和刻本のテキストが、すべて「端午の節句」まで辛抱強く挨拶を聞いてやっているのは、伊丹椿園という若い読本作家によって示された『笑林広記鈔』の訳文（原文に見える最後の一言「看燈之後」を、意図的か否か、「端午ノ時ニ」と訳している）の影響を受けているのかもしれないし、日本では「元宵節」をそれほど盛大に祝う

習慣がなかったせいかもしれないが、ひよっとしたら、日本人は中国人や朝鮮人ほど「せつかち」ではないという国民性（民族性）を映し出しているのかもしれない。要するに、中国人が最も「せつかち」であり、その次に「せつかち」なのが朝鮮人。しかし、朝鮮人は、中国人よりは若干気が長いのであろうが、それでも日本人に比べれば、ずっと気が短い、ということなのかもしれない。現代の国際社会における一般的な印象と合致するように思われるのは、気のせいであろうか。

130 燕衣（服が燃える）

原文

燕衣

一、最モ性急。一、最モ性緩。冬、日圍爐聚飲。性急者ノ衣墜シ爐中ニ。為火所燃。性緩者ノ見之ヲ從容トシテ謂曰ク。適有二支。見之ヲ已久。欲レトモ言ント。恐君ノ性急ナラフ。不レハ言ハ、又恐ハ不利アラ于君ニ。然ラハ則言レ之是耶。不言ハ是耶。性急者問以スト何事ヲ。曰ク。火燒ク君ノ裳ヲ。其ノ人遽曳衣而起テ。怒曰ク。既ニ然カクナラハ此ノ何不ニ早説カ。性緩者曰ク。外人道。君性急也。不リキ料果然。

書き下し文

衣を燕く

一は最も性急。一は最も性緩。冬日、炉を圍て聚飲す。性急なる者、衣、炉中に墜し。火に燃かる。性緩なる者、之を見て、從容として、謂て曰く、適に一事有り。之を見ること、已に久し。言んと欲すれども、君の性急なるを恐る。言はざれば、又、恐くは、君に利あらず。然らば、則ち之を言ふが是か。言はざるが是か。性急なる者、問ふ何事を以てすと。曰く、火君の裳を焼く。其の人、遽に衣を曳て起ち。怒て曰く、既に、然く此の如くならば、何ぞ早く説かざる。性緩なる者、曰く、外人道ふ。君、性急なりと。料らざりき、果して然り。

現代語訳

一人は極めてせつかちな性格であり、もう一人は極めてのんびりした性格であった。冬のある日、囲炉裏を取り囲むようにして、みんなでお酒を飲んでた。すると、せつかちな男の着物の裾が囲炉裏の中にぶら下がり、そこに火が燃え移ってしまった。のんびりした性格の男は、それを見て、ゆったりと、一語一語噛み締めるように言った。

「ちょうど今、ある出来事が、発生しました。これを見ること、すでに久しくなるのでありますが、それを言おうと思っても、何せあなたの性格はせつかちでありますから、どうしたものかと思えますし、かと言って、言わずに済ませてしまいますのも、あなたにとっては、よくないことのようにも思われます。然らば、則ち、これを言うのが正しいのか。はたまた、これを言わないのが正しいのか。」

せつかちな男が「いったい何が起こったというのか。」と訊ねると、こう答えた。「あなたの袴の裾に、火が燃え移っておりまして……。」

すると、せつかちな男は、慌てて着物をぐいっと引つ張って立ち上がり、カンカンに怒って言った。「もうすでにこんな状態になっているのに、どうして早く言わないんだ。」

そこで、のんびりした男は、言った。「あなたのことを、せつかちな男だなどと言う人がおりましたが、あなたが本当にこんなせつかちな男だったなんて、私は思いも寄りませんでしたわ。」

注

○『訳解笑林広記』卷之上・殊粟部(四〇丁表裏)。『新鵜笑林広記』卷之五・殊粟部(第三二三話、二丁表)。○燕衣「nu」|| 衣服を焼く。「燕」[nu]は「焼く」という意味の文言(書き言葉)。白話(話し言葉)では「烤」[ao]、「燒」[siao]、「燃焼」[tando]等を用いる。本話においても、会話文では「火焼君裳」のように「焼」が用いられている。なお、中国刊本『新刻笑林広記』(刊年不詳、善成堂刊、豊橋創造大学蔵本)は、この標題の二字を「焼衣」に作り、同『新刻笑林広記』(光緒五年(一八七九)刊、書肆不詳、架蔵本および京都大学附属図書館蔵本等)は「装衣」と誤刻している。○衣墜爐中|| 着物(の裾)が囲炉裏の中にぶら下がって。「墜」[zui]は「落ちる」「だらりとぶら下がる」意の動詞。和刻本は、「墜」に左訓「タレサカル」

(垂れ下がる)を附す。○為^ニ火^ニ所^レ燃^カ火に焼かれる。訓点は、原文のまま。「為^ニ物^ノ十所^ノ」(動詞)は、「:に^レされる」という受け身の意味を表す。通常は、「為^ニ火^ノ所^ト燃^ズ」(火の燃す所と為る)または「為^ニ火^ノ所^レ燃^サ」(火の為に燃さる)と訓む。○從容「congong」|| ゆったりと落ち着いている。日本語でも、「從容として」という形で用いられる。○適有一支|| ちょうど今、一つの出来事がある。おつとりとした性格の人が、ゆっくりと回りくどい説明を始める様子が表現されている。「適」[sh]は、「ちょうど今」「たまたま(このタイミングで)」という意味を表す副詞。「まさに」「たまたま」と訓読される。「支」[z]は「事」の古字。○然則言之是耶。不言是耶。|| 然らば則ち、これを言うが是なるや、これを言わざるが是なるや、という意味。これは、のんびりした性格の男の発言だが、その言い回しは中国語の文言(書き言葉、古典語)で記述されている。いきなり古語でしゃべり始めたかのようなニュアンスをもつ。口頭語(白話)に言い直すならば、「那麼、説這個好麼。還是不説好麼。」(じゃあ、それは言った方がいいのかな、言わない方がいいのかな。)となる。事は急を要する事態であるにも関わらず、こののんびり屋の男は、至極悠長に、文言(古語)などを小賢しく使って、気障な言い方をしているのである。○火烧君裳|| あなたの袴に火が付いて燃えている。「裳」[chag]は「スカート状の袴」「裳裾」の意。なお、「上下合わせた着物」の場合は「衣裳」[yishang]と言ひ、「裳」の字音が変化する。○遽曳衣而起|| 慌てて服を(火から勢いよく)ぐいっと引き抜いて、立ち上がる。「遽」[ju]は、「にわかに」「慌てて」「急遽」という意味の副詞。「曳」[ye]は、「引つ張る」意の動詞。○既然「jiran」|| 「もはや」である以上は「そうであるからには」という意味の副詞。現代中国語と同じ。「既に然く」という訓読語とは、かなりニュアンスの異なる口頭語(話し言葉)。○外人道。君性急。|| 周りの人たちは、あなたのことをせつかちな性格の人間だと思つていますが。「外人」[wairan]は、仲間内から見えて「外側の人」。つまり、「あなたのことを、よく知らない人たち」の意。対義語は「一家人」[yijiaten] (仲間内の人たち)。「内人」[neiren] (家内)ではない。なお、和刻本は、「外人道。君性急。」のように句読を切つて読んでいるが、中国原本(乾隆二六年(一七六一)宝仁堂刊、京都大学附属図書館谷村文庫蔵本)は「外人道君性急。不料果然。」とする。僅かな違いではあるが、中国原本の切り方のほうが、意味のまとまりによるバランスが取れており、読みやすい。○不料果然|| (周

りの人たちは、あなたのことをせつかちな人だと言つていたが) 果たして本当にそんな人だったなんて、思いも寄らなかつた。「不料」[bu liào]は、「意外である」「思いがけない」という意味。「果然」[guoran]は、「案の定」「やっぱりそうだった」という意味の副詞。いずれも、現代中国語と同じ。

補注

この話は、中国原本『笑林評』第三三五話(内題「笑林評下」、外題「笑林評 中」)、『笑府』巻六(第三二話「性緩」)に類話がある。

『笑林評』『笑府』の原文は、以下の通りである。本文を対校すれば、僅かに文字に異同はあるが、内容は同一である。ただし、『笑林評』のみ、手の込んだ評語が附加されている。『笑林評』には拙訳を添える。なお、『笑府』の日本語訳は、松枝茂夫『全訳笑府(上)』(岩波文庫、一九八三年一月、一九九〇二〇〇頁)を参照。

唐本『笑林評』第三三五話(万曆三十九年(一六一一)序、内題「笑林評下」、外題「笑林評 中」、国立公文書館(内閣文庫)蔵本、四三丁表)

一人性寛緩。冬日共人圍爐。見人裳尾。爲火所燒。乃曰有一事見之已久。欲言之、恐君性急。不言、恐傷君太多。然則言之是耶。不言之是耶。人問何事。曰火烧君裳。其人遽收衣而怒曰。見之久。何不蚤道。曰我言、君性躁急、果然。

安于佩弦。西門佩韋。是能鞭其後者。若夫嘽嘽慙慙以遊於世。而曰吾命制之。殆不可也。

ある男、のんびりした性格であった。冬のある日、囲炉裏を囲んでいたときのこと。(前に座っている男の) 袴の裾に火が着いたのを見て、男は言った。「もうずいぶん長い間、ある出来事を見つめていたのですが、それを言いたいと思ひましても、あなたはせつかちな人だから、どうしたものかと躊躇われます。かと言って、言わずにありましたら、あなたは大変なことになってしまふでしょう。ですからその、それを言うのが正しいのか、はたまた、それを

言わないのが正しいのか(やはりどうしても躊躇われます)。」

「何のことです。」

「あなたの袴に火が着いているのですよ。」

相手は慌てて着物をぐいっと引つ張り戻すと、カンカンに怒って言った。

「ずっと見ていたのなら、どうしてすぐに言わないんだ。」

「ほうら。やっぱりわしの言った通り、あんたはせっかちだったじゃろ。」

(編者のコメント) 董安于は(のんびりした性格であったので、自分への戒めとするために) 堅い弓の弦を帯にして、自分の心を引き締めた。

西門豹は(気性がせっかちであったので) 柔らかいなめし革の紐を帯にして、自分の心を落ち着かせた。いずれの場合も、それによって、

自らの性格上の欠点を矯め直すことができると考えたのである。とはいえ、(のろまの) 嘽嘽と(せっかちの) 慙慙が、共にこの世に生を

受け、自らの運命を自らの思いのままに変えようと思っても、おそらくそれは不可能である。(訳者注、生まれ付いた人間の性格というものは、根源的には、死んでも変わらないものである、ということ。)

【訳者注】董安于と西門豹の故事は『韓非子』觀行篇に見え(岩波文庫『韓非子(第二冊)』(金谷治訳注、一九九四年五月、一七八〜一七

九頁) 参照)、嘽嘽と慙慙の故事は『列子』力命篇に見える(岩波文庫『列子(下)』(小林勝人訳注、一九八七年四月、九三〜九五頁) 参照)。なお、「嘽嘽」は「のんびりとした性格」を擬人化した語、「慙慙」

は「性急で落ち着かない性格」を擬人化したものであり、歴史上の人物を表す名前(人名)ではない。いずれも『列子』中の寓話に登場する架空の存在である。

唐本『笑府』第三三話(明・泰昌元年(一六二〇)頃成立か、巻六・殊稟部、筑波大学中央図書館蔵本、二丁裏)

性緩

一人性緩。冬日共人圍爐。見人裳尾為火所燒。乃曰。有一事。見之已久。欲言。恐君性急。不然。又恐傷君。然

則言是耶。不言是耶。人間何事。曰。火燒君裳。其人遽收衣而怒曰。何不早言。曰。我道君性急。果然。

また、『笑府』所収の本文は、和刻本『刪笑府』(明和六年(一七六九)序、大本)に収録されている。和刻本『刪笑府』の本文を、中野三敏先生旧蔵本によって示す。和刻本『刪笑府』の本文は、一行あたりの字数(改行箇所)、句読の位置、ともに中国原本の『笑府』(国立公文書館(内閣文庫)蔵本)と一致しているだけでなく、左訓として附けられた風来山人(平賀源内)らしい、極めて気の利いた日本語訳が特徴的なテキストである。和刻本『笑府』に見られる特徴については、拙稿『笑府』三種比較攷(上・下)、『国語国文』第六八巻第一号・第二号、一九九九年一月・二月)を参照。

和刻本『刪笑府』第四四話(明和六年(一七六九)序、大本、中野三敏先生旧蔵本、一丁表裏)

性緩

一人性緩。冬日共人圍爐。見人裳尾為火所燒。乃曰。有一事。見之已久。欲言。恐君性急。不然。又恐傷君。然則言是耶。不言是耶。人間何事。曰。火燒君裳。其人遽收衣而怒曰。何不早言。曰。我道君性急。果然。

なお、武藤禎夫氏によれば、『中国笑話選—江戸小咄との交わり—』(東洋文庫24、平凡社、一九六四年八月、七三〜七四頁)、本話は落語「気の長短」の原話であり、寛文七年(一六六七)に刊行された『理屈物語』巻一に、中国笑話と同じ話が収録されているという。ただし、武藤氏は「江戸小咄でも古い時代に『和漢理屈物語』の断本があり」と述べておられるが、書誌学的には、本話が収録されているテキストは、「断本」ではなく「仮名草子」であり、書名は、内題に従い、『和漢理屈物語』ではなく『理屈物語』とすべきである。『理屈物語』については、天和二年(一六八二)

の刊本（早稲田大学図書館蔵）が Web 上で公開されているので見やすいが、寛文七年（一六六七）板とは異版であるため、寛文七年板の翻刻である『漸本大系』第二巻（東京堂出版、一九七六年二月、二二七頁）によって本文を示す。

仮名草子『理屈物語』巻之一（寛文七年（一六六七）刊）

三 裳の焦たるを驚かぬ事

事文類聚

もろこしに、さる人あり。むまれつきゆたかにして、物ごとにさわがぬ人なりしが、冬の日のことなるに、友だちとともに炉にあたりて、はなし居ける時、なにとかしたりけん、(七才)友だちの衣の裳に火つきて、もへあがり。されども友だち、これをゆめにもしらず。かの人へとくにしりしかども、さらにいわずして、しばらくありて、友だちにむかつていひけるハ、こゝに一つの大事あり、われ以前よりこれをミつけたれども、これをいわば君おどろきおそれ給ふべし、又いわずんばわれを恨給ふべし、かつうハ又、君の身もあやうかるべし、しからば、これをいひてよからんか、又はいわずしてよからんかといへり。友だちこれをきゝて、それハなに事なるやらん、いひ給へといへば、かの(七ウ)人、こゝろをしづかにしていへるハ、君が衣の裳に火つきてもへ待るといふ。友だちおどろき、やがてもミけし、おゝきにいきりていわく、なんぢ火つきてもゆる事を、とくに見付なば、なんぞはやくわれにいわざるといへば、かの人しづかにこたへていわく、われはじめよりいふごとく、いわば君おどろきおそれ給ふべしと、いまそのことばにたがわず、あんのごとく、君おどろきおそれ給へり、われこゝにおいて、いひてよかるべきか、いわずしてよかるべきかといわずやといへり。(八才)

寛文七年（一六六七）板『理屈物語』には、本話の出典が『事文類聚』であると明記されているが、武藤氏は前掲書において、『笑府』から直接翻訳したと考えるよりも、その元の話『応諧録』の「性急」あたりから取材されたと思われる。」と説明している。『事文類聚』及び『応諧録』の本文は、以下の通りである。

ただし、『理屈物語』の出典が『事文類聚』ではなく『応諧録』であるとすると武

藤氏の考え方は、修正しなければならぬ。『事文類聚』は、『芸文類聚』（全一〇〇巻、武徳七年（六二四）成）や『初学記』（全三〇巻、八世紀前半成）に就つて宋・祝穆によつて編纂された類書であり（前集六〇巻・後集五〇巻・続集二八巻・別集三三巻、淳祐六年（一二四〇）成）、元・富大用による新集三六巻・外集一五巻、元・祝淵による遺集一五巻を合わせ、元代の泰定三年（一三二六）に刊行された全二二六巻の一大書物群である。わが国では、仮名草子『理屈物語』が「洛陽書林山本五兵衛」から刊行された年の一年前、寛文六年（一六六六）に「洛陽京極書肆八尾勘兵衛友久」によつて和刻本が刊行されており、そのテキスト『新編古今事文類聚』「別集巻之二十一」（一七丁裏）に、「戯人性急」と題する本話の原話が収録されている。年代的に考えても、地域的に考えても、常識的に考えても、新刊書の内容を利用した可能性が極めて高いと思われるのである。仮名草子『理屈物語』所収話「裳の焦たるを驚かぬ事」の出典が『事文類聚』であることは、おそらく間違いないだろう。以下に、和刻本『新編古今事文類聚』の本文と日本語訳（拙訳）を以下に掲げる。

また、『応諧録』は、明・劉元卿（字は安成）によつて編纂された笑話集であり、中国での刊行時期は一六世紀後半であろうと推測される。中国古典文学大系59『歴代笑話選』（平凡社、一九七〇年五月、四一九頁）に見える松枝茂夫氏の解説によれば、本書の「話の数は二十一、『雪濤諧史』に入る。」とされるが『歴代笑話集』（王利器輯録、上海古典文学出版社、一九五六年十二月、一六一〜一六七頁）参照）、ここには確実に原本を確認しうるテキストを選び、陶珽編『說郭統』（明末・崇禎年間（一六二八〜一六四四）刊）巻四五に拠つて本文を掲げ、和刻本『新編古今事文類聚』と同様に、日本語訳（拙訳）を添えておく。

和刻本『新編古今事文類聚』別集巻之二十（寛文六年（一六六六）京都刊、早稲田大学図書館蔵本、一七丁裏）

戯二人ノ性急

有レ人性寛緩。冬ノ日共ニ人ト圍爐ヲ見テ人裳ノ尾ノ爲ニ火ノ所ニ燒。乃シ曰ク有レ一ノ事一見ルコト之ヲ已ニ久シ。欲スレハ言レト之ヲ恐ハ君性急。不レシハ言ハ傷ルコト君大ニ多クカラン。

然ラハ言フコト之ヲ是レ耶。不レコト言ハ之ヲ是レ耶。人間何ニ事ヲ曰ク。火燒ク君裳ヲ。遽ニ

收^レ衣^ヲ火^ニ滅^ス。大^ニ怒^テ曰^ク。見^ルコト之^ヲ久^シカラハ何^ソ不^ニ早^ク道^一。其^ノ人^ノ曰^ク我^レ言^フ君^カ性^急、果^シ是^レ乎^カ乎

せつちかな人をからかう

ゆつたりとした性格の人がいた。ある冬の日、誰かと囲^{いろり}裏^りを囲んでいたところ、相手の着物の裾^{すそ}に火が燃え移っているのが目に留まった。そこで、次のように言った。

「ある出来事が発生したのを、私はもう長い間、ずっと見ています。そのことを言おうと思うのですが、あなたは気が短いですから、やめておいた方がよいような気がします。しかしながら、言わないでおきましたら、あなたに大^{おお}怪^{おけ}我^がをさせることになるかもしれません。さすれば、これを言ってしまうのが正しいのでしょうか。それとも、言わずにおきまますのが正しいのでしょうか。」

「あなたの着物に火が燃え移っているのです。」

と言うと、相手は急いで着物を引っ張り上げ、火を消した。そして、カンカンに怒って言った。

「ずっと見ていたのなら、どうして早く言ってくれないのですか。」

「ほら、言ったでしょう。あなたは気が短いです。やっぱり私の言った通りでした。」

仮名草子『理屈物語』所収「裳^{もも}の焦^こたるを驚^{おどろ}かぬ事」は、内容的にも表現的にも年代的にも、和刻本『新編古今事文類聚』「別集卷之二十」所収「戯人性急」の、かなり忠実な日本語訳である。

明代刊本『説^{せつ}郭^{かく}續』巻四五所収「應^{おう}諧^{かい}録」(崇^{すう}禎^{てい}年間(一六二八〜四四)刊、

早^{はや}稲^{いな}田^{でん}大^{だい}学^{がく}図^ず書^{しょ}館^{くわん}蔵^{ざう}本^{ほん}、四^よ丁^{てい}裏^り五^ご丁^{てい}表^{ひょう})

性急

于^よ暉^{けい}子^し與^よ友^{ゆう}連^{れん}床^と圍^い爐^ろ而^り坐^{して}其^の友^と案^{あん}閱^{えつ}書^{しょ}而^り裳^{もも}曳^ひ

于^よ火^か甚^し熾^し于^よ暉^{けい}子^し從^{じゆ}容^{じやう}起^き向^{むか}友^{ゆう}前^{ぜん}拱^{こう}立^た作^{して}禮^{れい}而^り致^{して}詞^じ

曰^い適^{てい}有^り一^{いつ}事^じ欲^く以^て奉^{ほう}告^{こつ}諗^{ぜん}君^{きん}天^{てん}性^{せい}躁^{そう}急^{きふ}恐^{おそ}激^{げき}君^{きん}怒^ど欲^く不^ふ以^て告^{こつ}則^{すなは}與^よ人^{にん}非^ひ忠^{ちゆう}敢^{かん}請^{せい}惟^い君^{きん}寬^{かん}假^か能^{のう}忘^{わう}其^の怒^ど而^り後^ご敢^{かん}言^{げん}友^{ゆう}人^{にん}曰^い君^{きん}有^あ何^{なに}陳^{ちん}當^{たう}謹^{きん}奉^{ほう}教^{きやう}于^よ暉^{けい}子^し復^{ふく}謙^{けん}讓^{じやう}如^{ごと}初^{しよ}至^し再^{さい}至^し三^{さん}乃^{すなは}始^し遂^{すい}巡^{じゆん}言^{げん}曰^い時^{とき}火^か燃^{ねん}君^{きん}裳^{もも}也^{なり}友^{ゆう}起^き視^し之^の則^{すなは}熾^し矣^{なり}友^{ゆう}作^{して}色^{しき}曰^い柰^な何^{なに}不^ふ急^{きふ}以^て告^{こつ}而^り迂^い緩^{くわん}如^{ごと}是^{なり}于^よ暉^{けい}子^し曰^い人^{にん}謂^い君^{きん}性^{せい}急^{きふ}今^{いま}果^た然^{ぜん}耶^や

訳者注：■は「才(てへん)」+「處」。

せつち

于^よ暉^{けい}子^しは、友^{ゆう}だちとテ^ーブルを並^{なら}べ、囲^{いろり}裏^りを囲んで座^まっていた。于^よ暉^{けい}子^しの友^{ゆう}だちは、机^{けい}に寄^よりかかつて書^{しょ}物^{ぶつ}を讀^よんでいたが、着^き物^{ぶつ}が囲^{いろり}裏^りに垂^たれ下^りがり、ボウボウ燃^もえ始^はめた。于^よ暉^{けい}子^しは、静^{しず}かにゆつたりと立^たち上^あがって、友^{ゆう}だちの方^{かた}に進^{すす}み出^でて、礼^{れい}儀^ぎ正^{ただ}しく拱^{こう}手^ての御^ご辞^じ儀^ぎをすてから、次^{つぎ}のよう^{よう}に言^{げん}葉^{えつ}を述^のべた。

「ちょうど今、ある出来事が発生しました。あなたに御^ご報^{ほう}告^{こつ}申^まし上^あげたいとは思^{おも}うのですが、あなたが生まれながらイライラする性^{ちやう}の方^{かた}であることは承^ま知^ちしておられますので、あなたが激^{げき}しく怒^{いか}りになるかもしれませんから、御^ご報^{ほう}告^{こつ}申^まし上^あげないことに致します。しかしながら、それでは、やはり友人^{ゆうじん}として不^ふ誠^{まこと}実^{じつ}であるような気^きもします。そこで、敢^あえてあなたにお尋^{たず}ねします。どうか寛^{かん}大な心^{こころ}をお持^もちなさってください。もしも、あなたが決^{けつ}して怒^{いか}りにはならないと言^いってくださるならば、私も思^{おも}い切^きって申^まし上^あげることに致^{いた}しましょう。」

友^{ゆう}だちは言^{げん}った。

「いったい何^{なに}のことを言^{げん}っておられるのですか。仰^{おつしや}る通^{とお}りに致^{いた}しますから、ど^どうぞ言^{げん}ってください。」

そこで、于^よ暉^{けい}子^しは、またさきほどと同じように、へりくだった様子^{ようす}で、再^{さい}三^{さん}再^{さい}四^し、言^{げん}うべきか、言^{げん}わざるべきか、さんざん迷^まいに迷^まった末^{すえ}、こ^こう言^{げん}った。

「さきほどから、あなたの着^き物^{ぶつ}に火^かが燃^{ねん}え移^{うつ}っているのです。」

友^{ゆう}人^{にん}が立^たち上^あがり、着^き物^{ぶつ}に火^かが燃^{ねん}え移^{うつ}っているのを見^みてみると、も^もう着^き物^{ぶつ}は激^{げき}しく燃^もえさかっているではないか。友^{ゆう}人^{にん}は血^ち相^{さう}を變^かえて、こ^こう言^{げん}った。

「どうしてすぐに言^{げん}ってくれないんだよ。しかも、そんなにのろのろしやが

ってからに。」

于禪子は言った。

「あなたのことをせつかちな奴だ言っている人がいるようだが、果たして如何、やっぱりその通りだったんだね。」

余説

本話は、『訳解笑林広記』「殊粟部」(生まれつき一風変わった人の話)の第二話。第一話「作擗」に引き続き、第二話「燕衣」も、「異常なまでに気の長い人」の話が取り上げられている。

この話は、目の前で酒を飲んでいる人の衣服に火が燃え移っているというのに、「異常なまでに気の長い人」は、それをすぐには言おうとせず、言うべきか否か思いあぐねた末に、ゆつくりと、そして至極もったいぶった言葉遣いで、衣服に火が燃え移っていることを相手に告げる。また、ここで衣服に火が着いていた方の男は「異常なまでに気の短い人」と設定されており、より大きな笑いを誘う仕掛けになっている。そして、「気の長すぎる男」は、さらに言う。「周りの人たちは、あなたのことをせつかちな人などと言っているようですが、私には思いも寄りませんでした、あなたが本当に、そんなにまでもせつかちな人だったなんて。(外人道君性急。不料果然。)」と。

この話の「笑いのツボ」は、言ってみれば、尻に火が着いている人を見ても、それをすぐには相手に教えようとしめない、非常識なまでに反応の鈍い男の「常軌を逸した鈍臭さ」にあるのであろう。そして、そのような「異常なまでに気の長い男(「一最性緩こ)」を、「異常なまでに気の短い男(「一最性急こ)」と対比させたところに、構成上の配慮がある、ということであろう。

An Annotated Translation of *Yi jie Xiao lin guang ji, 10*

Yosuke KAWAKAMI

Center of Liberal Arts and Sciences, Faculty of Engineering